



第13回ESD大賞 受賞校実践集

主 催：NPO法人日本持続発展教育推進フォーラム

後 援：文部科学省 / 日本ユネスコ国内委員会 / 公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター
公益社団法人日本ユネスコ協会連盟 / 株式会社教育新聞社

はじめに

Education for Sustainable Development (ESD) は、「持続可能な社会の担い手を育む」教育といわれています。

地球上の様々な課題を自分たちに関係のある事としてとらえ、『持続可能な社会』を目指して、身近なところから課題解決に取り組もうとする人材を育成し、意識と行動を変革することを目指す教育です。

NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラムでは、この ESD の理念に基づく取組を積極的に実践する学校を奨励する「ESD 大賞」を平成 22 年に創設いたしました。

本事業は、全国の ESD の優れた実践を奨励するとともに、その輪を広げ、日本の持続可能な社会の構築に参画する人間づくりの推進に寄与することを目指しております。

13 回目となる今年は、全国の小・中・高等学校 37 校よりご応募をいただきました。

多くの優れた実践から受賞校を決定することは困難ではありましたが、第 13 回 ESD 大賞として、ここに受賞校を発表し、その実践をまとめました。

なお、第 13 回 ESD 大賞の副賞は、カシオ計算機株式会社様にご協力をいただきました。

本実践集が少しでも ESD 実践の参考・発展へとつながり、持続可能な社会の担い手づくりに寄与できれば幸いです。

目 次

◆はじめに	2
◆審査にあたって	4
◆講評	5
◆文部科学大臣賞	
東京家政学院中学校・高等学校	7
◆ユネスコスクール最優秀賞	
東京都杉並区立西田小学校	12
◆小学校賞	
愛媛県宇和島市立岩松小学校	17
◆中学校賞	
愛媛県新居浜市立別子中学校	22
◆高等学校賞	
関西創価高等学校	27
◆ベスト・アクティビティ賞	
愛知県立愛知商業高等学校	32
◆審査員特別賞	
東京都八王子市立横山第一小学校	37
賢明女子学院中学校・高等学校	42

【審査にあたって】

第13回 ESD 大賞の審査にあたっては、ESD の目標である「持続可能な社会づくりにかかわる課題を見出し、それらを解決するために必要な能力や態度を身に付けることを通して、持続可能な社会の形成者としてふさわしい資質や価値観を養うこと」に基づき、審査を行いました。

加えて、

- ① ESD の目標を実現するための教育活動を組織的・計画的に実践し、その成果を読み取ることができる。
- ② ESD についての指導内容・方法等に工夫改善され、新しい提言が行われている。などの観点も重視されています。

なお、「ベスト・アクティビティ賞」とは、学校や地域の特性を生かしたオリジナリティのある活動、他校にも生かせるアイデアに富んだ取組を行う学校を表彰しています。

「スタートアップ賞」はユネスコスクールに加盟して3年未満（加盟していない学校含む）の学校を対象とし、優れた実践を行っている学校を表彰しています。

※今年に関しましては、〈スタートアップ賞〉は該当なしとなりました。

今回惜しくも受賞を逃した学校においても、優れた取組が多くありました。各学校におきましては今後一層精進され、ESD の発展・充実に向けた取組となることを期待しています。

【講評】

細谷 美明

NP0 法人日本持続発展教育推進フォーラム理事、第13回 ESD 大賞査委員長

1 文部科学大臣賞（東京家政学院中学高等学校）

中高一貫校の特色を生かしながら、中学校1・2年生の縦割り班による地域で働く人々への取材を通して持続可能な地域社会の在り方を考察し、3年生による企業への取材活動で得た社会課題をSDGsの視点を通し解決しようとした、系統性のある広く社会全体を見渡したテーマ設定、多様な表現による活動にインパクトがありなおかつ生徒に深い学びを与えている。

2 ユネスコスクール最優秀賞（東京都杉並区立西田小学校）

「未来の学校づくり」といった確固とした理念と児童を中心としそれを支える教員、地域住民との「チームESD」による運営は高く評価される。特に「子供と大人が話し合う会」を定期的・日常的に開くことで、ESDの理念をもって地域の一員としての自覚や地域の課題を解決しようとする態度が児童一人一人に形成されその過程が明確に伝わってくる。

3 小学校賞（愛媛県宇和島市立岩松小学校）

学校の教育目標の見直しまで行い、SDGsに対する理解を深めESDカレンダーに象徴されるESD推進のための全体計画や指導計画づくりと多種多様な内容の実践活動は、学校・家庭・地域の連携を深め、学校を中核とした地域の活性化を図ることができた。本当の意味でのコミュニティスクールづくりに大きく貢献した。

4 中学校賞（愛媛県新居浜市立別子中学校）

地域の課題である過疎化を世界の最先端課題ととらえた発想が大胆であり高く評価できる。また、学校と地域が連携し「別子ファーム」による野菜作りとその販売は地域の活性化だけでなく、生徒一人一人に地域の一員であるとの意識を強く持たせ社会課題解決のスキルと広い視野を定着させたと言ってよい。まさに「Think Globally Act Locally」の具現化である。

5 高等学校賞（大阪府：関西創価高等学校）

計画・実践すべてがアグレッシブである。ESDの多くの内容を取り込み、学習、討論、提案のほか挫折した点にも触れ次の課題としていることは評価できる。また、企業や自治体と連携しながら提案も行うなど私立校ながら地域への貢献も果たされている。模擬国連の開催など地球的規模の視点での活動は高校生とは思えないダイナミックさを感じる。

6 ベスト・アクティビティ賞（愛知県立愛知商業高等学校）

「希望のはちみつリング」並びにフェアトレードアイス「幸せのはちみつカカオ」の商品開発を通じた東日本大震災の被災地救援と発展途上国支援といった広い視野でのアプローチ、ダイナミックな発想が高く評価できるとともに、政府や自治体との結びつきから今後の活動の持続性・発展性が期待できる。

7 審査員特別賞（東京都八王子市立横山第一小学校）

全校体制での地域学習から各学年での体験活動に展開し、その成果を保護者や地域に発信するだけでなく、SDG s 関係のコンテストに応募し受賞するなど、ESD の理念を具現化し「社会に開かれた教育課程」の見本のような今後の学校の在り方を示してくれた。

7 審査員特別賞（兵庫県：賢明女子学院中学校高等学校）

中学生と高校生の有志という限定的な活動ではあるが、学校が SDG s の普及活動をするのならこうだ、というような幅広い内容である。地域企業との連携、野菜作りといった体験活動、小学校への出前授業など、中高一貫校ならではの長所も生かした多角的・多面的な展開が素晴らしい。

文部科学大臣賞

東京家政学院中学高等学校

教諭 川邊 健司

マルチプルインテリジェンスを軸とした体系的 ESD・SDG s カリキュラムの構築 ～中学段階における学内外の連携強化による体験的プロジェクトを通して～

1 はじめに

本校は、東京都千代田区三番町に位置する今年で学院創設 100 年の節目を迎える私立中高一貫校である。本校の創設者である大江スミは、建学の精神に KVA (Knowledge 知識、Virtue 徳性、Art 技術) を掲げ、社会で自立する女性の育成を目指してきた。この精神は、近年教育界でも話題となっているブルームが提唱する目標分類学(Bloom's Taxonomy)における教育目標の領域 KSA (Knowledge、Skill、Attitude) にも通ずるものがあり、ESD にも示される持続可能な社会の担い手にとって必要な資質・能力であると考えている。この古くも新しい本校の建学の精神を育むために具現化された教育活動が ESD を軸とした多様なカリキュラムである。また、中高一貫校の特性を生かし、持続可能な社会の担い手の育成のために、6 カ年一貫の体系的なカリキュラムを設定している。併設大学への進学者が年々増加していることを踏まえ、中学・高校・大学の 10 年間、つまり人生の半分近くを過ごす千代田区三番町を生徒たちの「第二のふるさと」にするミッションのもと私立学校でありながら地域密着のプロジェクトを実施している。これらのプロジェクトは各学年で 10 年程前から段階的に計画、実施されてきた。それらを体系的に再構築したものが現在のカリキュラムである。

本校のプロジェクトの多くは総合的な学習の時間において実施されている。生徒の多様な学力を尊重し、評価することを目的としてハワード・ガードナー (Howard Gardner) が提唱する「マルチプルインテリジェンス理論」(Multiple Intelligences Theory) を学校が設定する目標に据え、目標に準拠したルーブリック等を活用して評価している。中学段階では振り返りシート等、言語的知能に左右される評価対象だけでなく、ポスターや記事、動画、プレゼンテーションなど多岐にわたる

学習成果を評価できるよう活動内容を工夫して実施している。

図 マルチプルインテリジェンス



出典) ハワード・ガードナー博士著「マルチプルインテリジェンス」

未来教育会議実行委員会「人一生の育ちレポート」(2018 年) より引用

表 1 本校のプロジェクトで育成を目指すインテリジェンス (●を重視、○は関連)

	中 1 中 2 PJ	中 3 PJ
言語的知能	○	○
論理的知能	○	○
空間的・視覚的知能	●	●
身体的・運動的知能		
リズム・音楽的知能		○
対人関係の知能	●	●
内観の知能	○	○
自然・環境の知能	○	○

従来重視されてきた言語的知能、論理的知能に加えて、その他の知能の育成を重視している

2 実践内容

(1) “こころ”と“まなび”をTSUNAGU プロジェクト（中学1年生・2年生）

「心と学びをつなぐ」、このプロジェクトを体験した生徒たちが名付けたプロジェクト名であり、ESD を象徴することばであると考えている。このプロジェクトでは、中学1年生・2年生が協働でチームを編成し、地域で働く大人に対して取材を行い、そこで得た働きがいや地域に対する想いをポスターで表現し、プレゼンテーションを行う。取材内容の検討から当日の取材先へのアポイントメント、ポスターデザインの構図などはすべて生徒の手によって行われる。本校周辺は、多くの国際機関や官公庁、オフィスビルがある一方、創業100年を超える老舗店舗も点在し、多様性に富んだ地域である。これらの店舗への取材を通して、生徒たちは千代田区の伝統や魅力、そこで生きる大人たちの“想い”を知ることとなる。また、異年齢集団で遂行するプロジェクトはそれぞれが自身の役割を自覚し、緊張感を持ちながらも女子中学生らしい温かな雰囲気の中で進められていく。入学間もない生徒たちがタテ（学内：他学年）のつながりとヨコ（学外：地域）のつながりを意識する機会となっている。

プロジェクトのまとめには、取材報告と制作ポスターを題材にしたプレゼンテーションを実施している。取材で受け取った地域に対する想いや課題をSDG s の17の目標と関連付けて考察・発表することで答えのない問いに真剣に向き合う姿勢を身につけていく。

写真1



写真2



写真3



写真1 取材のようす（老舗豆腐店）

写真2 完成ポスター（緑茶インストラクター）

写真3 ポスターを店舗にお届け（老舗甘酒屋）

約3ヶ月の長期プロジェクトでの学内外の継続的な交流を通して、生徒たちは“心のつながり”を体感していく。活動を通して、持続可能な社会の担い手として必要な資質・能力を体験的な活動を通して心や体で受け止めることの重要性を教えてくれる活動であると考えている。

(2) SDG s クリエイティブプロジェクト （中学3年生）

中学1年生、2年生での学習成果をもとに中学3年生では地域をESD、SDG s の視点でより深く捉えるプロジェクトを実施する。自身がソーシャルイノベーターとして世界を変革するための第一歩を踏み出していく。

主に学校周辺でSDG s に取り組む企業に取材を行い、そこから見出された社会課題を解決するための方法をチームで協力して考察する。中学3年生における最初の成果物は取材記事である。中学1年生、2年生で発揮された生徒たちのマルチプルインテリジェンスを生かしつつ、高校での活動を見据えて、成果を言語化することを目的として設定している。

写真4



写真 5



写真 4 取材のようす

写真 5 取材記事

※取材記事の作成は Think the earth が提供する作成フォームを使用

取材記事作成後は、中間報告を経て取材後に生徒が感じ取った社会課題の中から一つを選んで調査、研究を行う。プロジェクトの途中段階で生徒たちの必要に応じて企業や団体が主催するプレゼンテーションスキルアップ講座や社会課題や解決策を深掘りするためのミーティングを実施している。生徒たちはさまざまな大人との出会いの中で社会課題を解決することの必要性やその難しさを肌で感じ取っていくようになる。

写真 6



近隣企業での SDG s ミーティングに参加

表 2 生徒が設定した主な社会課題

テーマ	社会課題
食	パートナーシップで育む共存共栄
食	Let' s eliminate food loss
LGBTQ+	「一人の人間として見ていく」社会の実現
街づくり	秋葉原のタバコポイ捨て削減のために
ジェンダー	医師における女性の雇用格差
つくる責任	すべてのロスをなくすために

本校が家政学（主に衣食住）を軸とする女子校であることから、それらに関連するテーマを設定している生徒が多い。特筆すべきは取材先の企業の業種、職種について、衣食住や女性に関連するものに限定していないにも関わらず（結婚式場や不動産デベロッパー、ホテル等）、生徒たちが興味・関心に応じて、自身の足もとから自主的に本校の特性に関連した社会課題を選定している傾向が伺えることである。一見、無関係にも思える複数のリソースを掛け合わせることで起こるイノベーションに今後期待したい。

また、2022年度からはこれらの成果を動画にまとめコンテスト (Sustainable Award) に応募する予定である。3年間で養われたマルチプルインテリジェンスがどのような形で発揮されるのか、今から楽しみである。

（3）全校生徒が参加する学習発表会

中学の体験型プロジェクトにあわせて、高校では年間を通じて、「エキスパート探究」（高校1年生、衣食住に関連した社会課題の解決）、「ジグソー探究」（高校2年生、自身の興味や希望進路に関連する社会課題の解決）において調査・研究を行っている。毎年3月には中学1年生から高校2年生が一同に会し、1年間の学習成果を発信する発表会 (Global Presentation Award 以下 GPA) を実施している。この活動は単に学習成果の発表にとどまらない。高校生はかつて自身が体験したプロジェクトを下級生がどのように受け継いでいるかを確認し、過去の自分に想いを馳せながら自身の現在地を確認する機会となる。また中学生はこれから自身がどのような学習活動を行っていくのか、将来を見据える学びの機会となっている。GPAでは、全校生徒の投票で決定する最優秀賞 (GPA) や外部企業・団体が選定する特別賞等が授与される。1年間の学習成果を共有、相互評価することによって生徒たちは「自分は何ができるようになったか、次に何ができるか」を感じ取っていく。

GPAの様子は保護者、卒業生、プロジェクトに協力頂いた企業・団体にもオンライン等で公開され、本校の活動や成果を広く社会に発信、還元する機会となっている。この2年間は、コロナウイルス

感染症拡大のためオンラインのみでの公開であったが、今年度からはオンライン、対面のハイブリッドでの実施を予定している。さまざまな活動が制限される機会が多かった生徒たちが、この“リアル”な機会を通じて、学びに更なる化学反応を生み出すことを期待している。

写真7



写真8



写真7 GPA プレゼンテーションの様子

写真8 GPA 表彰式

3 成果と課題

ESD・SDGsの体系的なカリキュラムを構築して5年ほどが経過した。ESDが重視する「3つのつながり」の視点で成果と課題を検証する。

(1) 教材のつながり

総合的な学習の時間での体系的な取り組みを中心として学校行事や各教科での取り組みに大きな変化が生まれた。

その典型的な例が本校の冬の風物詩ともなった体育の時間での持久走である。国連 UNHCR 協会が主催する「難民と進む20億キロメートル」(2020年8月 コロナウイルス感染症拡大に伴いグローバルアクションとしては終了。本校はその後にも独自に実施している)の趣旨に賛同し、難民が1年間に強いられる移動の総距離、20億キロメートルを全国の仲間と協力して目指す活動である。難民の苦難に思いを馳せながら活動することで、自分の学びや行動が世界を変えていくことにつながる実感を持つことができる取り組みである。持久走のプログラムにあわせて道徳の授業では国連 UNHCR 協会主催のワークショップを中学全学年合同で実施しており、ESD・SDGsのプロジェクトを軸としてさまざまな教科で横断的な活動が行われるようになった。また、この活動は、本校のESD・SDGsカリキュラムで定める目標における問題点

(マルチプルインテリジェンス 身体的・運動的知能の育成を担保する活動の不足)を補う役割も果たしており、本校の求める生徒の資質・能力の育成にとっても非常に有意義な活動であると考えている。

写真9



写真9 プロジェクトの振り返りイベント

(横断幕は体育係が中心に毎年制作)

その他にも学外の協力も得ながらゲーミフィケーションの手法を生かした体験型ワークショップ等をプロジェクトと関連付けて実施することで学びを深める取り組みが学年、教科で行われるようになり、生徒の資質・能力の深化に貢献している。

写真10



写真10 SDGsカードゲーム (高校1年生)

写真11



写真11 Beyond SDGs 人生ゲーム (中学生)

特別活動(キャリア教育)の一環として併設大学の学生と合同実施

(2) 人とのつながり

中学の早い段階から社会に触れ、地域と密接な関係を持ちながら本校のプロジェクトは進められてきた。これらの取り組みは少しずつ地域社会の中でも共有、評価されてきている。2021年度には複数企業・店舗・団体の協力のもと、本校の学習成果を報告した動画を地域の大型ビジョン、さらにはメタバース空間で公開して頂いた。プロジェクトの成果を学内にとどめることなく、地域・社会へ積極的に配信していくことで、開かれた学

校としての役割の一端を担うことができたと考えている。

写真 12



秋葉原（東京都千代田区）の大型ビジョンで放映。生徒とともに見学

また、本プロジェクトで協力いただいた企業等からはプロジェクト終了後もつながりを持ち、地域で行われたトークディスカッションや SDGs イベント等にお誘い頂き、地域連携の輪はさらに広がりを見せてきている。今後、さらに連携を深めるとともに地域からの多様な要望に応える学内の体制構築もより一層進めていくことが課題である。

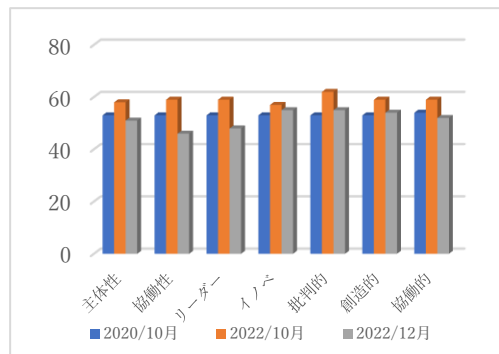
（３）能力・態度のつながり

本校ではマルチプルインテリジェンスを軸に総合的な学習の時間における学校の目標を設定している。これらの能力や態度（コンピテンシー）が生徒にどの程度身につけているかを検証する一つの方法として Institution for Global Society が提供する評価ツール「Ai GROW」を活用しており、本校の育成する目標に準拠した活動の教育効果を定量化し、測定している。

表 3 Ai GROW 診断結果抜粋

2020 年度 入学生経年推移（学年中央値）

コンピテンシー	2020/10	2022/10	2022/12
主体性	53	58	51
協働性	53	59	46
リーダーシップ	53	58	48
イノベーション	53	57	55
批判的思考力	53	62	55
創造的思考力	53	59	54
協働的思考力	54	59	52



コンピテンシー中央値の推移を検証すると中学 1 年生から中学 2 年生にかけて資質・能力が向上していることが伺える。中学 1 年生、2 年生の協働チームでのプロジェクトにおける学びの共有は、本校が目標としている資質・能力の育成に効果的であることを確認することができた。一方で、中学 3 年生で各コンピテンシーの下降が見られる結果となった。今後、諸活動における振り返りやルーブリックに基づく生徒自己評価等を一層充実させ、中 3 学年でのプロジェクトのあり方を高校での活動への接続、連携も踏まえて検討していきたい。

最後に、本校の学びを示すパンフレット『しあわせ学問 家政学』に「私のしあわせは、私からはじまって、私が広げて育てるもの、守るもの、分かち合うもの」という一節がある。誰かの幸せを願う心の豊かさこそが持続可能な社会の実現につながると信じて、また、今回の ESD 大賞の受賞を励みに生徒たちとともにさらに学びを深めていきたいと考えている。

ユネスコスクール最優秀賞

東京都杉並区立西田小学校

教諭 佐々木 哲弥

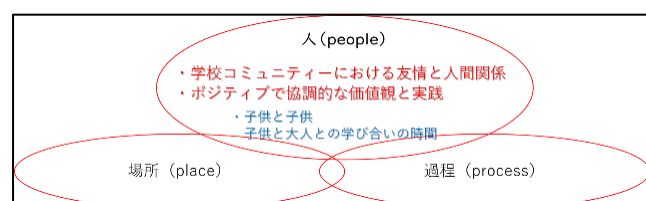
子供と大人と みんなでつくる「未来の学校」

1. はじめに

杉並区立西田小学校は東京都杉並区のほぼ中央に位置し、中央線荻窪駅から徒歩 20 分程の閑静な住宅地にある。都心でありながら、周囲は公園や屋敷林などがある豊かな自然環境に恵まれた地域である。現在 24 学級 700 名を超える児童が在籍し、杉並区でも比較的規模の大きい小学校である。

西田小学校は 2014 年にユネスコスクールに認定され、2016 年よりユネスコスクール活動を本格的に推進し始めた。2016～2018 年は「ESD 重点校形成事業～輝け！サステイナブルスクール～」認定校に、2017～2018 年は東京都教育委員会「持続可能な社会づくりに向けた教育推進校」に認定され、多くの先生方にご指導いただきながら、カリキュラムマネジメント、地域連携を積極的に推進してきた。さらに 2019 年ユネスコ・バンコクが主催する「ハッピースクールプロジェクト」に参加した。「ハッピースクールプロジェクト」とはユネスコ・バンコク事務所が立ち上げたプロジェクトである。幸福と教育の質という 2 つの要素を結びつけることを目指し、既存の教育制度から転換して、幸福度の拡大に貢献する価値観、強み、能力を見直すことで、多様な才能や知性を受容するようなシステムを提唱している。

「ハッピースクールプロジェクト」に取り組むにあたり、校長は「学校に関わる全ての人が幸せを感じることでできる学校づくり」に取り組もうと、教職員・児童に呼びかけた。学校の様々な場面



学習内容

生活科・総合的な学習の時間を中心としたESDの学び

- ・1年 自然と仲よし
- ・2年 西田の町の宝物
- ・3年 自然と共に暮らそう
- ・4年 みんなにやさしい町づくり
- ・5年 世界を見直して環境を考えよう
- ・6年 世界へ羽ばたこう

で一人一人の子供たちが輝くことができるような学校となるよう、職員一丸となって取り組んでいる。

本校は、社会に開かれた教育課程の実現を目指し、本校の教育目標である『「気付き・考え・行動する子」～Think Globally, Act Locally な西田の子の育成』を目指す中で、ESD・SDGs を推進してきた。

しかし一方で、地域社会への ESD・SDGs のさらなる広がりを見守る児童たち自らが欲するようになっていた。また児童が 1 年間学んだ成果が地域や学校に積み重ならず、活動の継続性に対して課題意識を抱えていた。「未来の学校」に向けた話し合いの中で、6 年生児童が「地域とのさらなる協働」と「ESD・SDGs 活動の継続性」という課題を見出していった。

2. 実践内容

「NISHITA未来の学校」これまでの経緯

2020年 2月「ESD子供報告会」後、体育館で開催
目的 学びの成果の共有 地域課題の共有
参加者 200名程度、教員、保護者、地域住民、他校教員、ESD研究者等

3年生で学習した地域の自然や生き物について発表します！

ICT支援員です。私たちの仕事について知ってもらいたい

大人のひとと話すのってなんか楽しい！

2021年 3月27日(土) オンラインで開催
目的 学びの成果の共有 地域課題の共有
「地域版SDGsの作成」→学校経営方針へ
参加者 32名 教員、保護者、地域住民
成果 ・SDGs17「パートナーシップ」の重要性確認～80周年記念行事との関連

3. NISHITA未来の学校

子供主体の「NISHITA 未来の学校」
に向けた話し合い

「こんな西田の地域にしたい」という思いを
みんなで実現するために集まる場

定期的・日常的に保護者・地域の方と対話を続けたい。

保護者や地域の方から、自分たちの取組についてアドバイスが欲しい。

いろいろな大人と話したら考えが広がるかもしれない。

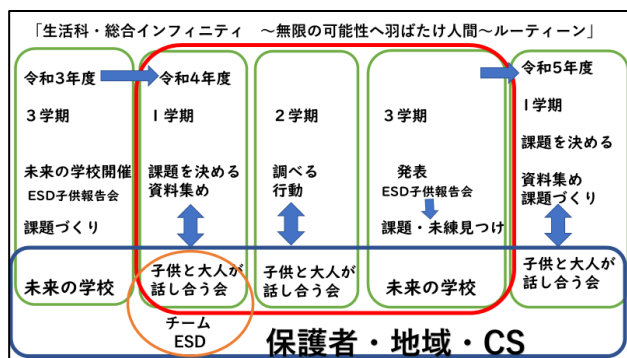
願いの実現のために大人に協力してもらいたい。



コロナ禍による休校後、学校での学びや生活が大きく変化した。その中でも校長の指示の下、「子供を信じ、子供に任せる」取組を継続することで、新しい生活様式への適応を学校一丸となって行ってきた。その成果として、「未来の学校」と「子供と大人の話し合いの時間」「チーム ESD」が生み出されたといえる。以下にこれらの取組を紹介する。

(1) 「未来の学校」

本校では 2019 年より社会に開かれた教育課程の実現のため、学校運営協議会と連携して 1 年間の学校の教育活動をふり返り、次年度以降の教育活動について地域の方とともに考える、「NISHITA 未来の学校」（以下「未来の学校」）を行っている。「未来の学校」では、1 年間の学びの成果と地域課題の共有を通して次年度の教育活動の重点項目に関する合意形成を目指してきた。コロナ前は学校公開の後に体育館にて、児童、教員、地域の方々がそれぞれのブースで発表し、今後の地域の持続可能性について自由に話し合いを行った。コロナ禍では、オンラインでの実施となり、規模は縮小したものの、社会に開かれた教育課程の具現化の機会として継続された。



4. 子供と大人の話し合いの時間

子供と大人の話し合いの時間

第1回2022年7月 第2回2022年10月
学校公開の時間の1時間 @教室/体育館
参加者：児童、保護者、出前授業の講師、大学生

食品ロスを減らすレシピを考えました。どうですか。

5年環境問題：海洋プラスチックを減らすために、町でゴミを落とさないことが大切だと分かった。そのために、ゴミ拾いをしていきたいと考えています。町の人と一緒にゴミ拾いをしていくための方法を探しています。

僕らの考えている問題について、どう思いますか。

賞賛 感想 助言

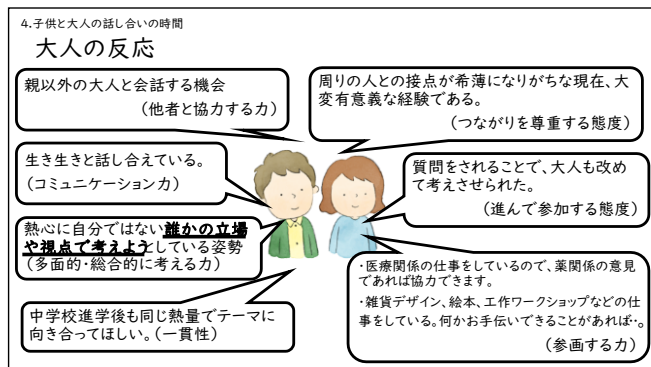


2020 年度の未来の学校では、次年度予定されている 80 周年記念行事に向け、改めて地域との連携を重視する旨を校長が宣言した。

2021 年度の開催に向けて、子供主体の場にするために、有志の子供が集まり、計画から考えるために話し合いを行った。話し合いを重ねる中で「未来の学校」に対する具体的なイメージを共有し、その充実に向けた意見が出された。本校のさらなる ESD 推進に対して、児童自身が課題意識をもち、改善のために話し合い、解決策を全校児童、校長・教職員、保護者地域に提案する一連の行動が児童により主体的・自主的に行われた。児童の実行委員による話し合いの成果として、2 つの提案がなされた。第 1 に「ESD をさらに推進するために保護者や地域の方の助言や協力を得る機会の創設。」第 2 に「子供たちの学習活動を支援したり、ともに学んだりすることで、ESD を支えてくれる仕組みの創設」である。これらの提案を 3 月にオンラインで開催された「未来の学校」で発信し、全校児童・保護者・地域の方・学校運営協議会、学校支援本部、教職員との間で実現に向け合意形成がなされた。この提案を受け今年度より「子供と大人の話し合いの時間」と、学校支援本部と連携して「チーム ESD」が設立され、実際の活動が始まった。

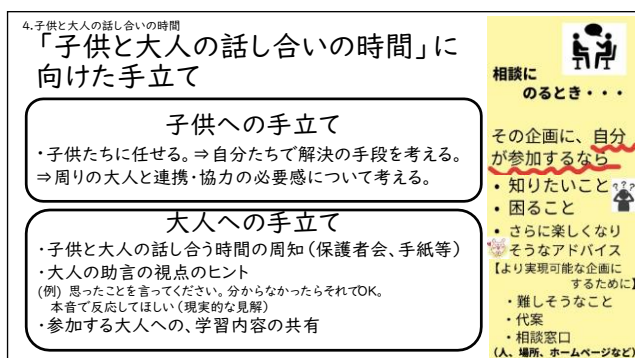
(2) 「子供と大人の話し合いの時間」

「未来の学校」での提案を受けて、今年度校内



の研究推進部が中心となり、「子供と大人の話し合いの時間」の起案がなされた。この時間に向けて教員は子供、大人それぞれに以下のような手立てを行った。子供への手立ては、まず子供たちに学習のテーマや行動の手段を任せた。教員があまり口を出さず、周りの大人に頼ることのよさに気付けるように、徹底的に見守った。「子供に任せる」ことに教員も挑戦した。また、大人に対しては、この時間を保護者会や学年だより等で周知した。また、助言の視点のヒントを示し会場に掲示した。

7月の学校公開の際に行った「子供と大人の話し合いの時間」では、自分たちの探究するテーマや課題を、保護者や地域の大人、これまで出前授業等でご指導いただいた方々に発信した。それに対して大人は協働者として、「賞賛」「感想」「助言」の言葉がけを子供にかけた。これらの取組により、大人と話し合うことが子供たちの思考や可能性を広げることとなり、大人も考えさせられる有意義な時間となった。その後10月には具体的な行動に向けた話し合いが行われた。



(3) チーム ESD

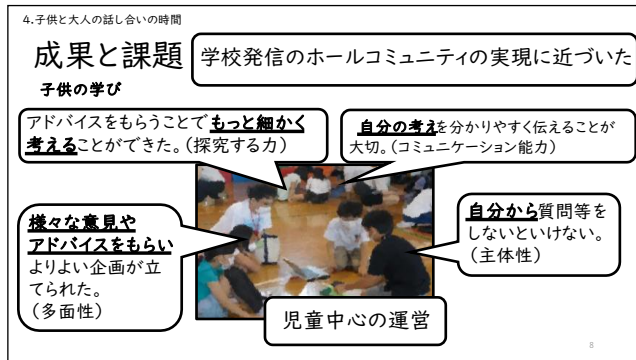
「未来の学校」において、実行委員の子供たちが提案した「子供たちの学習活動を支援したり、ともに、学んだりすることで、ESD を支えてくれる仕組みの創設」を具現化するため、研究主任と西田小学校学校支援本部との間で話し合いがもたれた。かねてより、実践に熱心に取り組んでいる教員が異動すると、活動の空洞化が生じることが心配されていた。また、子供たちの学びの成果を学校のみでなく、地域に根差したものにしていくためには、地域の協力者・協働者を増やし広げていくことの必要性について学校と学校支援本部の間で共通の認識をもっていた。このことに関して、子供たちも同じ課題意識をもっていたことに驚かされた。

「チーム ESD」は今年度、様々な活動の中で試験的に積み重ねている。具体的には5年生の「パイオガスづくりの出前授業」や「善福寺川調査」において、当該学年の保護者だけではなく、全家庭の保護者宛に参加を呼びかけた。学年の教員が学校支援本部と相談しチラシを作成、学校支援本部が申し込み等の受け皿となり、連携しながら活動を行っていく。子供たちの学習支援や地域の課題解決に協働して取り組んでくれる仲間として大人の参加を求めることが少しずつ実現している。

3. 成果と課題

(1) 未来の学校の成果と課題

実行委員の子供たちは「未来の学校」に向けた話し合いの過程で、同窓会や学校運営協議会、学校支援本部の方々が、よりよい地域をつくろうという思いに関わり合っていることに気付くことができた。また学校や地域の未来を担おうとする責任感や未来思考が育成されたと考える。さらに課題解決に向け、これまでの本校の取組を批判的に振り返ることもできた。さらに、全校児童や保護者・同窓会・学校支援本部等の大人に働きかける行動力が育った。自分と地域とのつながりに気づき、地域の活動に参加しようとする態度が育成された。また、「未来の学校」により、地域と学校との関係を近付けることができたと考える。次年度の学校の教育活動の方向性を示せたことは社会に



開かれた教育課程の実現に貢献する活動であると考え。何より、子供たちが学校の教育活動や自分たちの取組を批判的に考え、新しい発想で提案を行うことができたことは画期的なことである。

課題として、運営主体の持続可能性の確保、目的の明確化であると考え。過去3回の「未来の学校」は学校と学校運営協議会の共催の形式がとられた。より子供たちや地域主体にしていくためには、学校・保護者・地域・子供たち、の役割分担を行っていくことが必要であろう。

(2)「子供と大人の話し合いの時間」の

成果と課題

成果として、子供たちの感想から、自らの課題意識をより細分化することでより探求の目的が達成できたり、自分の考えを分かりやすく伝える大切さに気付いたりすることができた。さらに、コミュニケーション能力も向上し、課題解決のために多面的に考えることもできた。また学校発信のホールコミュニティの実現に近付くことができたことなどが大きな成果であると考え。

今年度からの「子供と大人の話し合いの時間」により、多様な他者との対話により多様性に対する理解が深まった。また多様な意見に触れる中で多面的に考える力が育ったと考える。より持続的、日常的な保護者・地域住民・専門家等との対話の機会を設けることで、探究活動をさらに推進することができたと考える。

課題として、よりたくさんの地域の方に参加してもらうための工夫が求められる。また、児童主体の、児童の課題意識に沿った運営がなされることを期待したい。

(3)「チーム ESD」の成果と課題

成果として、子供からの発信で3Rの推進のため、服のリサイクルに協働してくれる大人の参加を呼び掛ける取組も行われるなど、その存在が少しずつ認識され始めている。学校の学習活動について、広く地域に伝え、協力を仰ぎながら、ひいては協働者としてともに持続可能な社会づくりを実現することができれば、社会に開かれた教育課程を具現化していくことができたといえるであろう。これらは持続的に ESD を推進する素地ができたともいえる。

この取組はまだ始まったばかりであり、試行錯誤しながらすすめられている。学校と子供、学校支援本部との熟議の中でよりよいあり方が提案され変化してくことであろう。参加者はまだ少ないが、今後は ESD に関わる諸領域について、チームをつくっていくことを学校支援本部は計画している。

まとめ

「未来の学校」「子供と大人の話し合いの時間」「チーム ESD」どれも、学校や学校運営協議会、学校支援本部、保護者そして子供との連携と協働がより必要である。また継続的に行うための組織作りが課題である。今後の展望として、児童の個別のニーズに対応するきめ細やかな連携の維持や、行政との連携を深めていくことに取組みたい。

活動を通じた教職員の変容として、カリキュラムデザインの技能の向上が挙げられる。また、「子供と大人の話し合いの時間」などの活動を学年、教員なりに解釈し、自由に活用することができた。保護者や地域の方との学び合いが児童の成長を著しく促すことに気づき、さらなる連携先や機会作りに取り組むようになった。さらに80周年記念行事を機に、各学年様々な取組を行うなど、地域連携推進に向けて教師たち自身が主体的に行動するようになった。

都市の最大の教育資源は「人」であると考え。本実践は、この都市最大の資源である「人」が会える場、語り合う場の一つの形を提案し、実践することができたと考えている。

コロナ禍において、これまで当たり前に行われてきた「人と人」との関わりによる学びが制限さ

れたとき、私たちは今一度地域を見直す中で、地域の「人」との関わりからの学びの大切さに気付かされた。「未来の学校」は子供たち、教員、学校運営協議会、学校支援本部等の方との熟議の中で生み出された学びの一つの形であり、「子供と大人の話し合いの時間」は新たなつながりを見つけ出す「時」と「場」である。また、「チーム ESD」は、つながりによって生まれた知を蓄積し、持続し、発展させる仕組みである。これらの仕組みを通して、本校のユネスコスクール・ESD 活動をより活性化し、ひいてはホールコミュニティを実現していくことに今後も取り組んでいく。



小学校賞

愛媛県宇和島市立岩松小学校
校長 武内 和也

ふるさとを愛し、共に学び、未来を拓く力を身に付けた児童の育成

1 はじめに

本校は、愛媛県宇和島市津島町の中心に位置し、児童数166名、学級数7（特別支援学級1を含む）の小規模校で、今年度で学校創立150周年を迎える歴史と伝統のある学校である。令和元年度からコミュニティ・スクールとなり、現在は保護者も地域も学校教育について理解し、協力を惜しまない環境ができています。自然豊かな校区には広さ13.3ヘクタールを誇る日本庭園である南楽園があり、四季折々のイベントが行われている。校区の中央には岩松川が流れ、春先にはシロウオ漁が行われている。また、岩松地区の町並みは、昨年、世界各国の歴史的建造物や文化遺産の保全活動に取り組むアメリカのワールドモニュメント財団に、“その存続が危ぶまれる世界遺産リスト”の一つに選ばれた。このように、校区は豊かな自然環境や歴史環境、文化環境などの宝庫である。

しかし、児童の多くは、身近にある様々な環境の素晴らしさを見過ごしたり、その存続に対しても他人事のように思ったりしている。このような児童の実態から、児童が岩松の豊かな自然環境や歴史環境、文化環境などに関わり、地域とつながることで、ふるさとの素晴らしさに気付かせ、「ふるさとを愛する心」を育てたいと考えた。

また、新学習指導要領においては、「持続可能な社会の創り手」に必要な資質・能力を育成することが掲げられており、ESD（持続可能な開発のための教育）の視点からSDGsに関する教育活動を進め、「未来を拓く力」を身に付けさせる必要がある。

さらに、学校創立150いわ周年事業に取り組む過程を通して、今後、地域や学校が50年、100年と続く未来に向けて、地域の一員として、仲間と共に学び、考え、課題解決に主体的に取り組んでいく児童を育てたいと考え、本主題を設定した。

2 実践内容

(1) SDGsに関する実態調査と全校集会

① SDGsに関する実態調査

本校児童がSDGsに関してどの程度理解しているかの実態を知るため、昨年4月にSDGsについてのアンケートを実施した。その結果、「SDGsのことを知らない」と答えた児童が70%、「SDGsという言葉聞いたことはあるけれど、何なのかは知らない」と答えた児童が24%、「SDGsについて知っているし、何なのか大まかに説明できる」と答えた児童はわずか6%であった。この事実から、子どもたちにまずSDGsとは何かから伝えていく必要性を強く感じた。

② SDGsについての全校集会

上記の実態調査を受けて、校長が講師となり、「SDGsって何？」と題する全校児童集会を行った。現在の世界で起こっている様々な問題はつながっており、その解決のためには一人一人ができることから取り組んでいくことの大切さを伝えた。この集会により、児童は、SDGsとは何なのかについて知り、一人一人の身近な取組が地球全体の問題解決につながっていくことに気付く、ふるさとの持続可能な未来に向けて、主体的に取り組んでいこうとする気持ちが芽生えた。

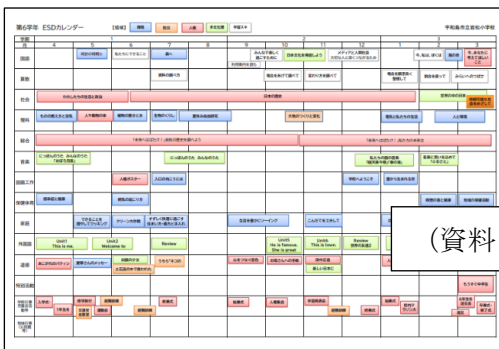


全校集会の後、児童一人一人に「SDGsを達成するために自分にできることは何か」を考えさせ、タブレット端末を使って回答させた。児童たちは、「ごみのポイ捨てをしない」「ごみの分別をする」「エコバッグを使う」「ご飯や食べ物を残さない」など、自分ですぐにできる取組をたくさん考えていた。児童の考えた取組は、お昼の放送で紹介し、SDGsに関する意識をさらに高めた。

(2) ESDカレンダーの作成と学校の教育目標の見直し

① ESDカレンダーの作成

ふるさとと持続可能な未来の創り手となる資質・能力を育成し、SDGsを達成するための教育として、教育課程の中にESDを位置付け、ESDカレンダーを作成した。(資料1)「ふるさと教育」を柱とした総合的な学習の時間を中心に、「環境」「防災」「人権」「多文化理解」「学習スキル」の領域を全教科の学習に位置付け、教科等横断的な学びとなるように、全体計画と各学年の年間指導計画のカリキュラムマネジメントを行った。このカレンダーにより、各学年の取組を行う際に、SDGsを達成するためにESDカレンダーに記載された領域を意識して指導していくように、共通理解を図り、共通実践していった。



(資料1)

② 学校の教育目標の見直し

昨年度の学校の教育目標は、「ふるさとを愛し、心身ともに健康で、共に学ぼうとする岩松っ子の育成」であったが、学校創立 150 周年を迎えるにあたり、新学習指導要領の理念である「持続可能な社会の創り手」の育成を目指して、「ふるさとを愛し、共に学び、未来を拓く岩松の子どもを育てる」とリニューアルした。そして、「未来を拓く力」を次のように定義した。

- ①挑む力 ②やり抜く力 ③認め合う力
- ④支え合う力⑤コミュニケーション能力
- ⑥つながる力 ⑦他者と協働する力
- ⑧自ら考え行動する力 ⑨ICTを活用する力 ⑩レジリエンス

これらの力は、ESDの視点で育成したい7つの資質・能力とリンクするものである。

- ①批判的に考える力 ②未来像を予想して計画を立てる力 ③多面的・総合的に考える力 ④コミュニケーションを行う力
- ⑤他者と協力する態度 ⑥つながりを尊重する態度 ⑦進んで参加する態度

学校の教育目標を見直すことによって、学校の教育活動全体でESDに取り組んでいこうとする、ホールスクールアプローチの意識が高まった。

(3) 地域素材や地域人材を生かした、各学年の実践

① 6年生 総合的な学習の時間

「未来に伝えたい岩松の宝」

6年生は、総合的な学習の時間に、岩松の歴史について学習した。単元の導入で岩松の町並みを探検したが、その際に、CS（コミュニティ・スクール）協力員の方々に案内してもらい、インターネットや文献では得ることができない、町の魅力を知ることができた。その後、子どもたちは、自分たちのもっと調べたい場所ごとにグループ



プを作って調べ学習を行い、再度現地を訪れるなどして、まとめていった。まとめた内容の中間発表として、広島県呉市の小学校との交流学习をオンラインで行い、お互いの校区の宝を紹介し合った。さらに、自分たちで調べた岩松の歴史を学校



自慢CMとして、地元のケーブルテレビの協力のもと制作し、「うわじま学校自慢CM大賞」コンテストに出品した。子どもたちは、総合的な学習

の時間で岩松の歴史について学習したことを通して、ふるさと岩松の素晴らしさを再発見し、ふるさと岩松を愛する心が育ってきた。

② 5年生 総合的な学習の時間

「岩松防衛隊」

5年生は、総合的な学習の時間に、防災について学習した。単元の導入で東日本大震災と西日本豪雨災害について、実際にそれらを体験した方々から講話をしてもらった。その後、子どもたちは、東日本大震災と西日本豪雨災害の二つに分かれてグループを作り、調べ学習を行い、まとめた。調べ学習の途中では、オンライン授業を行い、西日本豪雨災害で被災された方や災害復興のボランティア活動に関わった方々からの講話を聴き、学びを深めていった。



また、全校での地震・津波の避難訓練を行った後、高台の2次避難場所にある学校の防災倉庫に不足していた、毛布などの物品を運ぶ活動も行った。子どもたちは、総合的な学習の時間で防災に



について学習したことを通して、南海トラフ巨大地震などの自然災害から命を守るために、普段から地域の方々とながら、ふるさとの未来につ

いて考えることが必要であることに気づき、自助だけでなく共助が大切であることを学んだ。今年は自然災害について調べたことを学習発表会で発表した。

③ 3年生 総合的な学習の時間

「岩松川の恵み」

3年生は、総合的な学習の時間に、岩松川について学習した。単元の導入で岩松川を採検したが、その際に、CS（コミュニティ・スクール）協力員の方々にも参加してもらい、岩松川についてたくさんの秘密を知ることができた。その後、子ども



たちは、自分たちのもっと調べたい内容ごとにグループを作り、調べ学習を行い、まとめた。



調べ学習の途中では、長年にわたって岩松川でウナギ漁を行っている地域の方に、ウナギ漁についての話を聞いて、学びを深めていっ

た。さらに、岩松川の早春の風物詩であるシロウオ漁を見学し、岩松川の恵みを実感していた。また、新型コロナウイルス感染症拡大のため実現しなかったが、地域貢献活動として、地域の産業まつりである「しらうお祭り」の翌日のごみ拾いを宇和島東高校津島分校3年生の生徒たちと実施する計画を立てていた。宇和島東高校津島分校3年生の生徒たちには、新聞紙を使ったエコバッグの作り方を教えてもら

い、プラスチックごみの削減について考えることができた。子どもたちは総合的な学習の時間で岩松川について学習したことを通して、ふるさと岩松の素晴らしさについて知り、ふるさとを愛する心が育ってきた。今年は岩松川について調べたことを学習発表会で発表した。



(4) SDGsに関わる全校での実践

① 委員会活動における取組

各委員会においてSDGsに関する取組を行った。図書委員会は、児童のSDGsに関する興味



や関心を高めていくために、SDGsに関する図書を購入し、図書館の前にコーナーを作って展示した。

また、こども新聞を3紙購

入し、各階に新聞コーナーを設置し、SDGsに関する記事を紹介した。放送委員会は、毎日の昼の放送に



において、こども新聞の中のSDGsに関する記事

を紹介し、紹介した記事を切り抜き、付箋にコメントを記入したものを校内に掲示した。給食委員会は、10月の食品ロス削減月間に合わせて食品ロスに関するポスターを製作し、全校に啓発した。保健委員会は手洗いの大切さを呼び掛けるポスターにSDG sの目標3「すべての人に健康と福祉を」のロゴを入れるなど、各委員会でSDG sを意識した取組を行った。

② 150周年記念学習発表会でのSDG sに関する発表

今年度の学校創立150周年記念学習発表会の際に、2年生は「スイミー」の発表の中で海の環境保全の大切さを、3年生は岩松川の恵みについて調べたことを発表する中で、岩松川の環境を保全するために自分たちでできることを発表した。4年生は福祉学習についてまとめたことを発表する中



で、共生社会の大切さを、5年生は様々な自然災害について発表する中で、地球温暖化を防ぐことの大切さとともに、自助だけでなく、人と人がつながる共助が大切であることを発表した。また、6年生は15年後の自分たちの未来を想像した劇を、1年生は150周年に関する内容を発表した。

学校・家庭・地域との連携や情報発信

① 地区防災組織、CS（コミュニティ・スクール）協力員との連携

全校での地震・津波の避難訓練を行った際に、地区防災組織の方々や、CS（コミュニティ・スクール）協力員の方々にも協力していただいた。子どもたちは、人と人がつながる共助の大切さを実感することができた。

地区防災組織の方々や、CS（コミュニティ・スクール）協力員の方々にも協力していただいた。子どもたちは、人と人がつながる共助の大切さを実感することができた。



② ホームページによる情報発信

ふるさと教育や防災教育、SDG sに関する様々な教育活動の様子を、学校のホームページに公開して、情報発信を行っている。各学年や全校で取り組んでいる活動をタイムリーに公開することで、学校で学習したり、体験したりしたことについて家庭で保護者と児童が話し合い、学習した内容の理解を深めることができている。

③ 結MOREによる出前授業

昨年度、1、2年生を対象にしてSDG sに関する出前授業をオンラインで行った。講師は、グローバルユース国連大使である二人の高校生が結成した結MOREである。二人が取り組んでいるSDG sアクションプロジェクトの一つであり、低学年にも分かりやすい内容だった。二人の高校生がSDG sの達成に向けて真剣に取り組んでいる姿に、子どもたちも教職員も刺激を受けた。

(6) 教職員研修の実施

ESD及びSDG sに関する教職員の知識や理解を深めるために、年度当初の職員会議において、ESDを推進していくことがこれからの学校教育の使命であることを伝え、校内研修会において、ESD及びSDG sに関する教職員研修を2年間で8回実施した。また、校内でESDを推進するためのバイブルとして、令和3年5月に改訂された、「持続可能な開発のための教育（ESD）推進の手引き」を印刷・配付し、折に触れて活用した。

また、愛媛大学教育学部が開催するESD研修会やESD認定ティーチャープログラムにも教職員に参加させ、参加した教職員に報告させることでESD及びSDG sに関する理解を深めた。

3 成果と課題

(1) 研究の成果

① 今年11月に児童を対象にSDG sについてのアンケートを実施した。その結果、「SDG sについて知っているし、何なのか大まかに説明できる」と回答した児童は59%で、2年生以上の児童だけなら、70%の児童が「SDG sについて大まかに説明できる」と回答している。この結果から、子どもたちのSDG sに関する意識が高まり、知

識・理解も深まったことが分かる。

② 学校の教育目標を見直し、学校の新たな教育目標で目指す「未来を拓く力」をE S Dの視点で育成したい資質・能力とリンクさせたことで、学校の教育活動全体でE S Dに取り組んでいこうとする意識が高まった。また、S D G sを達成するための教育として、E S Dをカリキュラムに位置付け、総合的な学習の時間や各教科等だけでなく、委員会活動など様々な教育活動で取り組んだことで、児童はS D G sの学習と自らの生活を結び付けて考えることができるようになった。そして、ふるさとの持続可能な未来に向けて、主体的に取り組んでいく児童が少しずつ育ってきた。

③ 各学年の総合的な学習の時間に、岩松の町並みや岩松川などの地域素材や、C S（コミュニティ・スクール）協力員の方々など地域人材を生かした体験活動を多く取り入れることにより、児童が身近な環境や地域に住む人々の素晴らしさに気付き、ふるさとを愛する心が育ってきた。また、人と人とがつながることの大切さや素晴らしさを実感し、パートナーシップで目標を達成しようとする意識が高まった。

④ 今年度の学校創立 150 周年記念学習発表会の際に、S D G sや創立 150 周年に関する内容を各学年が発表することで、児童のS D G sに関する意識が高まり、知識・理解も深まった。また、岩松地区の自然を守ることの大切さや、自助だけでなく、人と人とがつながり、地域で協力しながら防災に取り組んでいく共助が大切であることを保護者や地域の方に対して啓発することもできた。

(2) 研究の課題

① 現在はコロナ禍のため、地域の方との活動にも制限がある。一人一人の身近な取組が地球全体の問題解決につながっていくことに、地域貢献を通して実感させる必要がある。

② 毎年教職員の異動があるため、転任して来た教職員に対して、E S D及びS D G sに関する知識・理解を深めていく必要がある。

③ 学校評価のE S D推進の項目の結果から、E S Dカレンダーの活用が十分ではなく、改善が必要であることが分かった。「深い学び」につながるように、総合的な学習の時間を柱として、教科等

横断的な学びとなるように、ブラッシュアップしていく必要がある。

中学校賞

新居浜市立別子中学校

共に野菜をつくり、共に未来をつくる

教諭 池田 光希

—地域協働型農業学習『別子ファーム』の実践を通して—

1 はじめに

(1) 本校について

本校は、新居浜市の市街地から車で約1時間の山間部にある旧別子山村（H15 に新居浜市に編入合併）に位置している。別子銅山が栄えた時期には、人口約1万人であったが、閉山以降は人口減少により、本校は休校と開校を繰り返すようになった。地域の要望を受けて、新居浜市が平成28年に「別子中学校 学び創生事業」を始めたことで、本校は、校区外から生徒を受け入れ、英語・理数教育を充実させた「グローバルジュニアハイスクール」として再スタートを切り、現在に至っている（R4度全校生徒18名）。また、校区外の生徒については、寄宿舎『立志寮』で自治的な寮運営を行っていたり、地域の方々との交流を増やしたりしながら、学校の教育目標である「社会に役立つ人」の育成を目指している。

(2) 『別子ファーム』誕生のきっかけ

若者についての調査（※1）によると、日本の若者の自己肯定感が低いことや社会に対する当事者意識の低さが読み取れる。ESDを通して子どもがこれからの社会をつくっていくための教育を実践しているにも関わらず、肝心の子どもたちは、自分を肯定できず、社会を他人事として捉えていることは、ESD推進における重要な課題であると言える。本校の生徒の中にもペーパーテストで測れる認知能力の比較に振り回され、自己肯定感を下げてしまったり、社会とのつながりよりも各教科の学習時間を優先することに重きをおいたりしている現実があった。

このような実態から、生徒が持続可能な社会づくりの担い手となるためには、生徒が社会との接点を増やし、自己を肯定的に捉えながら社会に主体的に参画することでウェルビーイングを高めることを目指したいと考えた。子どもが社会との接点を持つために最も身近になる

フィールドが地域になる。

別子ファームは、生徒たちが学校と寮との往復に忙しく過ごす中でも、大切にしてきた地域との関わりの中から誕生した。地域における重要で差し迫った過疎化という課題に関心を向け、授業等を通して学んだSDGsの考え方で地域課題を解決できないかと考えたことから始まった。「Think Globally Act Locally」の考え方を生かすと、過疎化は世界が発展していけばいくほど、今後あらゆる地域で課題に挙げられるものになると考えることができる。それは世界最先端の課題であり、その課題を乗り越えることができれば、世界の課題解決に貢献できたことになる。そして、それは足元の実践から始まることに生徒たちは、気付いていった。そして、SDGs17「パートナーシップで目標を達成しよう」の考え方を軸にして、地域の方々の得意分野である野菜づくりと中学生の体力やアイデアを生かして、地域と生徒が協働で野菜を育てる別子ファームという活動が生まれた。

※1 第46回「国や社会に対する意識」日本財団2023
第20回「国や社会に対する意識」日本財団2019

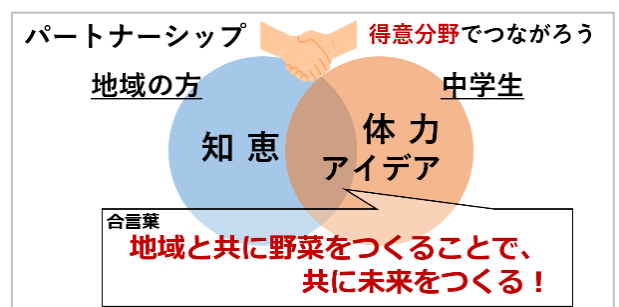


図1：パートナーシップのイメージ

2 実践内容

(1) 理念づくり

活動にあたっては、手段が目的化しないように理念をつくることから始めた。話し合いによって策定された理念は、「中学生と地域がパートナーシップを結び、地域を元気にする」となった。現在も、すべての活動がこの理念に沿ったものになっているかどうかを確認しながら、活動を展開している。この理念に基づくと、野菜づくりは目的ではなく、この理念を果たすための手段ということになる。生徒たちは、様々な活動において、何のためにそれを行うのかを常に問い続けながら、活動の目的が揺るがないようにすることができた。

(2) 野菜づくり

① 中学生のアイデア×地域の知恵

地域にある、使われていない土地を借り、いよいよ野菜づくりが始まる。しかし、生徒はもちろん、教職員にも農業に精通している者はおらず、土作りから苗植えの仕方までを地域の方々に教えてもらった。ここからわかることは、生徒にとってこの活動における“先生”は、教職員ではなく、地域の方ということだ。生徒は、地域の“先生”に教えてもらいながら農作業を行う。自然に直に向き合い、五感を使いながら土の柔らかさや匂い、苗の繊細さ、その土地の風を感じながら生命の種を植えていった。生徒の希望で、夏にはトマトやピーマンなどの夏野菜を、秋には白菜や大根などを植え、収穫時には大きな喜びと充実感が得られた。

収穫までの過程は、何でも順風満帆とはいかず、困難もある。しかし、うまく育たずに枯れかけた野菜が地域の方の知恵によって復活するなど、有限性ある生命を育むことの尊さを感じながら、作物を次々と実らせていった。



図2：苗植えと収穫の様子

② 想定外を乗り越える

自然と向き合いながらのこの活動において、想定外の事態にも直面した。一つ目は、自然災害である。主な災害は、台風による被害だった。台風は事前に到来することがわかっていたにも関わらず、対策の甘さや想定を上回る風雨の強さなどで、それまで大切に育ててきた作物が支柱ごと倒されて大きな被害が出た。大切にしてきたものが無惨にもなぎ倒された後の畑は、生徒にとって辛い現実となった。倒された野菜を撤去したり、支柱を立て直したりしたときには、自然の力には敵わないことを多くの生徒が痛感していた。

また、二つ目は、動物による被害だ。大根の収穫予定日の朝に猿が畑に侵入し、大根を食い荒らされてしまった。周囲にはネットを張って予防していたにも関わらず、ネットを噛みちぎられていた。一度猿に狙われた畑は今後も狙われるという地域の方の言葉を受けて、現在は猿の対策を検討している。

最後は、コロナ禍の影響である。交流機会の減少や計画崩れによって、生徒はやりきれなさやもどかしさを感じるようになった。しかし、こういうときこそ地域の方々が口にする「野菜は手間をかけた分だけ、苦労した分だけ、それに応えてくれる」という言葉に支えられてきた。生徒たちは手紙を書いたり、野菜をプレゼントしたりして、そのときできることをひたむきに実行しながら、地域とつながり続けていった。こうした取組もあり、現在では別子ファームが地域の多くの方に認知され、応援や協力をしてくださる方が増えている。

(3) 野菜販売

昨年度から別子ファームで収穫した野菜の販売にも挑戦している。これまでは収穫した野菜を自分たちで食べたり、自宅で家族と調理したり、地域の方にプレゼントしたりしていたが、生徒から「野菜販売をすることでより別子山地域のことをPRできる。」という考えから販売を目指すことになった。

以前から職場体験学習でお世話になっていた新居浜市の観光施設「マイントピア別子」に依頼したところ快諾してくださり、3日間の限

定出店となった。ここで、別子ファームの理念に基づいて、野菜販売の目的を設定した。その目的は、「野菜販売を通して、お客様と別子山地域をつなぐこと。」とし、来場者に、興味を持ってもらい、応援者になってもらい、協力者になってもらうことを目指すことになった。この目的に全員で合意できたことで、野菜を完売させて儲けを得ることが目的ではなく、販売という手段を通して、理念の実現を目指すことが共通認識できた。

実際の販売にあたっては、商品選定や価格設定、広報戦略などを行う必要があり、生徒たちは、役割を決め、商品となる作物の管理やチラシづくり、市内の産直市場を参考にするために現地調査を行うなど、試行錯誤を繰り返しながら行動を起こしていった。



図3：販売チラシ（生徒作成）



図4：販売ブース

販売には、マスコミによる取材や報道もあり、用意していた野菜は売り切れるなど大盛況となった。また、これまで接点のなかった方々と広くつながることができた。来場者との対話を通して、別子ファームの取組について紹介したり、別子山地域の良さをアピールできたりしたことで、逆にエールをいただき、生徒たちにとって大きな励みになった。また、販売を通して、生産・流通・小売までのビジネスモデルを体験できたことで現代社会の土台となる経済活動を体感することもできた。その一方で、活動後

の振り返りでは課題が多く出された。売り切れ後に来られた方々を残念がらせてしまったことや、出荷準備時の手際の悪さ、適正価格の在り方、食品ロスなどが見えてきて、来年度への改善策を練る必要があった。

(4) PDCA サイクル

① 話し合い活動

本実践は、主に総合的な学習の時間で取り組んでいる。また、少人数の学校であるという特徴を生かし、全学年で話し合い活動や農作業等を行っている。異学年で活動することで、経験のある上級生が下級生をリードしたり、一人一人のアイデアを生かしながら、取組を発展させたりした。こうして、単一学年のみの学びに比べ、学び合いの機会が増えた。

話し合い活動において特に大切にしていることは、誰一人取り残さずに、対話によって合意形成を図ることである。意見や考えが異なるのは、当たり前のもので、それを安易に多数決によって決めることはせず、少数派の意見も大切にしながら、あくまでも対話を通して合意を図り、意思決定を行っている。

② 三つの部署

野菜づくりができない冬季には、野菜販売や一年間の活動を振り返り、多くの課題を見出した。その課題を次年度に解決・改善させるために課題を大きく三つに分類し、その課題に応じたチーム（部署）を組んだ。今年度は、「野菜管理部」、「地域連携部」、「広報・PR部」の三つの部署となり、それぞれの部署に生徒たちが自分の興味・関心や強みを生かせる場所に配属することになった。部署によって人数の偏りもあったが、あくまでも適材適所で力を発揮することでチーム全体のパフォーマンスが向上することや、全体で話し合っ決めてきたことを部署に任せることで、意思決定のスピードを上げることができた。このように生徒自らでPDCAサイクルを回すことで、年々活動が発展している。

(5) 教師の変容

① 「学びの伴走者」としての教師

この取組は教師としての在り方を見つめ直す機会にもなった。こうした探究学習を進めていく上では、教師は知識や経験を伝達して指導するのではなく、生徒の学びの伴走者として、生徒の自己決定や探究を促したりすることが大切になる。教師によっては、これまでの教師像とは異なる生徒への関わりとなるため、互いにファシリテーションやコーチングの仕方について試行錯誤しながら生徒への関わり方について探究し続けている。

② 地域や教科とのつながりを生み出す教師

通知表に必要な各教科の観点や行動評価という評価軸だけでなく、教師がESDの資質・能力という観点で生徒一人一人を見ようとする視点が生まれている。また、地域との協働で変容する生徒の姿を教師が見て、社会と接し、生徒が地域と関わることの意義を感じ、地域の方と教師との対話も増えている。

そして、少しずつ教科横断的な学びにも発展している。英語を使った海外の学生への活動紹介や、家庭科の調理実習、社会科における経済などの学習等、各教科担当が別子ファームの取組と関連させた授業を行っている。この実践により、生徒自身が学ぶことの意義を感じられるようになって考えている。



図5：別子ファームを中心とした学びのイメージ

(6) ESDによるパートナーシップの広がり

① 12年ぶりに夏祭りが復活

別子ファームの活動を中心に地域とのつながりを深めていったことで、今年度は生徒の発案で、地域から消滅していた夏祭りを復活させることができた。12年ぶりの復活となり、生徒がゼロから企画・運営して実現させた。地域の願いであった伝統芸能「トンカッカ踊り」と「牛

若踊り」の復活を目玉にして、生徒と保護者、卒業生、地域住民が一緒に踊ることで「別子」で紐づく人たちが一つになった。地域の方が諦めかけていた祭りの復活を生徒たちが実現したことで、中学生の存在が地域にとって大きな喜びや希望となった。



図6：「ふるさと別子夏まつり」の様子

② 猪鍋を囲む会

今年度の12月には、地域で取れた猪肉と別子ファームで収穫した大根や白菜などを、3年生が地域の方々の手ほどきで調理した。生徒にも地域の方にも温かい笑顔があり、世間話などの雑談により、お互いにとって有意義な時間になっていた。生徒からも「あの時間は、至福の時間でした。」という声が寄せられた。目的にそって課題解決を図る対話も大切だが、他愛もない雑談が人の心と心を近付けることをその場にいた者同士が感じていた。別子ファームによるESDは、生徒たちの力によって、持続可能な社会に向けた様々な具体的な取組に現れ始めている。

3 成果と課題

(1) 成果

生徒へのアンケート調査で、成果と捉えられる以下のような記述があった。

- ① 持続可能な社会づくりの当事者意識の向上
- ・社会に少しでも貢献できることに大きな喜びを感じた。
- ・別子山地域の他にも、自分の住んでいる地域の行事にも積極的に参加して、地域を盛り上げていきたい。
- ・笑顔になる地域の方を見て、この地域の温かさを守っていきたい。

上記の記述から、社会づくりは他人事から自分事になって変わってきていることがわかった。

② 持続可能な社会づくりの見方・考え方

・思い切って行動すれば、つながりが広がり未来が変わるのだ。

・それぞれが長所を生かして協働しているとき、みんなが生き生きとしていた。

・どんなことでも見方を変えて考えることが大切だとわかった。人を見るときにもいいところを見られるようになった。

・理念や目標を大切にすることで、目的を見失わずに行動できた。

上記の記述から、持続可能な社会をつくるための見方や考え方が広がっていることがわかった。

また、4件法による2回(6月、12月)の定量的な調査で、主体性、協働性、探究性、社会性について生徒の自己評価を尋ねたところ、4つの観点すべてにおいて、0.2~0.4ポイント上昇した。ここから、別子ファームの活動は、これら4つの力を伸ばしていると考えられる。

(2) 課題

① 持続可能な仕組みづくり

この取組は今年度で3年目を迎える。発足時から活動している3年生は、まもなく卒業し、関わってきた教師もいずれは異動することになる。これまで試行錯誤しながら活動を推進してきたが、この活動を人が変わっても持続できるよう仕組みづくりを急ぐ必要が。ポイントとなるのは、以下の三つである。

一つ目は、生徒自身による活動理念や内容の伝承である。全学年で取り組んでいることを生かし、経験のある3年生が中心となり、2年生のサポートを受けながら1年生に伝えていくことを、リーダー経験として生徒自身が学んでいく必要がある。

二つ目は、教師の役割分担である。ESD主任という校務分掌をもつ教師が主導して3年間実践してきたが、教師がチームとしてこの学習活動を作り出すために、役割分担を細分化させたい。具体的には、総合的な学習の時間の前に担当する教師で授業1コマ分を使って、授業準備を行うことである。探究学習を教師が探究することで、活動理念なども複数の教師で共有できるだろう。

最後は、地域のキーパーソンとさらにつなが

ることである。生徒も教師も必ず入れ替わるが、地域の方はこの土地に居続けることになる。現在、中心となって関わってくださる方とさらに強くつながっていくことに加え、関わってくださる方の裾野を広げることも目指したい。これら三つのポイントに取り組むことで持続可能な仕組みづくりに近づけると考えている。

② 卒業生を生かす

この活動を経験した卒業生が10名以上いる。この活動は、パートナーシップを大切にしたものであるため、今後、その卒業生が地域に帰ってこられる機会を創出することで、若い世代の力で未来をつくることにつながると考えている。「別子ファーム」では、野菜販売や野菜の収穫、調理実習など、また「ふるさと別子夏まつり」では、別子に里帰りできるように在校生で準備を整えたい。過疎化という地域課題を抱えるこの地域にとってこれほど心強い若者はいない。

4 さいごに

この別子ファームという活動は、人や自然と向き合い続ける活動とも言える。自然に適応する人間本来の在り方や、多文化共生社会を支える民主主義への理解は、五感や実体験を伴う学びによって磨かれると考えている。そう考えると、持続可能な社会を形成するために必要不可欠なことは、人間と自然の営みの原理原則を理解していることであり、それがなければ決してAIやデジタルを正しい判断で使いこなすことができないだろう。多様な価値観が渦巻く中で、この不易(原理原則)と流行(デジタル活用技術等)を大切できる人間こそが、持続可能な社会を形成できるのであり、この活動はその一助となるものと信じて、活動を発展させ続けたい。

高等学校賞

関西創価高等学校
教諭 小山 弘

「世界市民」育成プログラムの開発の取り組み

1. はじめに

関西創価高等学校は、1973年に創価女子学園として、大阪府交野市の地に設立された。1982年に男女共学となり、関西創価中学校・高等学校と改称。昨年で開校50年を迎えた。

「人間主義」を標榜し、五項目の校訓を掲げ、日本の未来を担い、世界の文化の発展に貢献する、有為の人材を輩出することを目指してきた。

校訓の五に「進取の気性に富み、栄光ある日本の指導者、世界の指導者に育て」とあるように、本校は、開校当初から「世界の指導者」＝グローバルリーダーの育成に力を入れてきた。

2014年、文部科学省は、国際的に活躍できる人材育成を目的にスーパーグローバルハイスクール（Super Global High School、略称：SGH）事業を開始した。本校は、SGH事業に参加することで、創立精神にかなった「世界市民教育」をより具体的に実践できると考え、申請に踏み切った。

2015年度の募集において採択され、グローバル教育の先進校として、「探究」をはじめ、数々の新しい取り組みに挑戦してきた。その結果、中間評価では最高評価を獲得。2019年3月をもって、指定期間の5年を終了したが、現在、SGHネットワーク参加校として取り組みを続けている。

また、2017年にはユネスコスクールに加盟。SGHとユネスコスクールのネットワークを活用し、交流の輪を広げつつ、創価の「世界市民教育」を展開中である。

2. 実践内容

SGH認定とともに、世界市民育成プログラムをスタートさせた。本校は、「他人の不幸の上に自分の幸福を築くことはしない」という信条を培って欲しいとの創立者の訴え（第1回入学式のスピーチ）を平和教育の指針と定め、「創造性豊かな世界市民」の育成を目指している。

プログラムのスタートにあたり、「世界市民」とは何か、その育成において身につけるべき資質・能力は何か、全教員で検討し、次のように定義した。

○世界市民とは

「生命の尊厳」を基底に据え、いかなる国の人々とも誠実に交流・連帯できる「開かれた心」と実力をもち、世界のために貢献する人格である。

○世界市民の資質・能力

- ・世界の人々のため平和のために貢献するとの「使命感」
- ・他者との違いを理解、尊重し、苦悩に寄り添う「共感力」
- ・地球的課題を自分事として考え、取り組む「問題解決への創造力」

ユネスコが「平和の文化」を築くために大切にしたい価値観として示した「わたしの平和宣言」6項目（1. すべての生命を大切にします。2. どんな暴力も許しません。3. 思いやりの心を持ち、助け合います。4. 相手の立場に立って考えます。5. かけがえのない地球環境を守ります。6. みんなで力をあわせます。）は、本校の教育信条を具体化するうえで大切な行動規範でもあると捉えている。これを踏まえ、「生命の尊厳」を第一とする、力ある「世界市民」を育む教育活動に取り組んでいる。

この資質・能力を育成するための具体的な取り組みとして、以下のプログラムを実施している。

(1) GRIT(Global Research & Inquiry Time)

GRITとは、登校する土曜日（月2回程度）に毎回3時間を使い、「環境・開発・人権・平和」の4分野に関する問題をグループで探究し、年度末にその成果を発表する、全校生徒を対象とした学習である。建学の精神を学ぶ「創立精神学習」のGRIT1と国連が提起している地球的課題について探究するGRIT2で構成されている。

1年次では、世界で起こっているさまざまな問題を学び、主に知識を蓄えることに努める。



2年次では、プレゼンテーションをはじめとするアウトプットの力を養うことを目指す。1年次で関心を持った問題を掘り下げ、6月の創価大学研修を発表の場として研究成果をまとめる。研究としては初期段階ではあるが、大学の先生方に対してプレゼンテーションを行い、アドバイスをいただく。その後、大学院生からのアドバイスもいただきながら、一年を通じてさらに探究を深め、年度末に全員が、1年生のしている前でポスターセッションを行う。



3年次では、3年間のGRITの集大成として、MUN（模擬国連 Model United Nations）に学年全員で取り組み、合意形成力を培う。4～5人のグループに分かれ、それぞれが一国を担当。自分たちが担当した国の政治・経済や抱えている問題を調査し、その国の大使になりきって、模擬国連総会に臨む。それぞれの国の事情や思惑を超えて、問題解決のために意見を戦わせ、世界を想定した実践的な力をつける。2022年度は「気候変動と気候変動に対するレジリエンス強化の実現」をテーマ

として総会を開催。終了後は学んだ内容を全員が論文にまとめ発信した。



(2) SP (Soka Progress Class)

SP (Soka Progress Class) とは、英語・数学を中心により高度な内容を扱う授業のことで、希望者に対し、平日の放課後に実施している。

(3) UP (University Partnership)

UP (University Partnership) クラスとは、高大連携プログラムの一つで、SPと同じく平日の放課後に月1回、希望者を対象に実施。大学・国際機関などから講師を招き、地球規模の課題について学ぶ。大学レベルの内容を高校生向けにアレンジしていただくことで、GRITでの探究活動のレベルアップに役立っている。

(4) LC (Learning Cluster)

LC (Learning Cluster) は、2・3年生の希望者から選拔し、チームで「環境・開発・人権・平和」の4分野からテーマを決め、探究活動を行うもの。活動は全て英語で行う。夏・冬のLC特別プログラムを通して、探究を深め、成果としてまとめることを目指す。

今年度は、「世界市民とは何か？」をテーマに、5つのトピックでカナダの大学生とともにリサーチを行い、シンポジウムを開催。発表を行う。



(5) GCS (Global Citizenship Seminar)

世界を舞台に活躍しておられる有識者をお招きし、学期に一度の割合で、全校生徒を対象として講演を行っていただく GCS (Global Citizenship Seminar) を開催している。

(6) FW (Field Work)

また、新型コロナウイルス感染症の影響で、中断を余儀なくされたが、2020年の2月まで、東京・広島・東北を訪問する国内FW、アメリカ創価大学をはじめ、ロサンゼルス近郊の有名大学を訪問し、探究活動を深める海外FW等のプログラムを行ってきた。どのフィールドワークも、参加した生徒は、目を見張る成長を遂げ、さまざまな分野で活躍をしている。現地での交流やふれあいが、いかに大きな触発になるかを実感できるプログラムである。



広島FWは、8月6日の平和記念式典に合わせて実施。原爆資料館の見学や広島女学院高校で開催

されるピースフォーラムに参加するとともに、被爆者の皆さんとの語らいを通して、核兵器廃絶・世界平和の実現を目指す思いを固める。感染対策を万全に施し、2021年度より再開した。

海外FWは、LC (Learning Cluster) 生の探究活動の総仕上げとして実施してきた。

SUA (アメリカ創価大学)をはじめ、UCLA (カリフォルニア大学ロサンゼルス校)、USC (南カリフォルニア大学)、UCI (カリフォルニア大学アーバイン校)などの全米屈指の名門大学を訪問。

元国連事務次長チョウドリ氏や核時代平和財団のクリーガー所長をはじめ、アメリカが誇る知性とのセッションを通して、これまでの取り組みに対するアドバイスをいただきながら、探究活動を完成させてきた。



(7) ユネスコスクールとしての取り組み

冒頭で触れたように、本校は、2017年にユネスコスクールに加盟し、ユネスコスクールとしての活動を行っている。

ユネスコスクールとは、ユネスコ憲章に示されたユネスコの理念を実現するため、平和や国際的な連携を実践する学校で、ESDの推進拠点として位置付けられている。その活動目的は、ユネスコスクール・ネットワークの活用による世界中の学校と生徒間・教師間の交流を通じ、情報や体験を分かち合うこと、地球規模の諸問題に若者が対処できるような新しい教育内容や手法の開発、発展を目指すこととなっている。SGHの取り組みとともに、私たちはユネスコスクールを意識した取り組みを行ってきた。

① ユネスコスクール間の交流

2020年1月末に実施した海外FWでは、アメリカ・サンディエゴのユネスコスクールである、ザ・グラウアースクールと交流した。

実施にあたり、地球的課題についてディスカッションをすることはできないかと打診したところ、本校がユネスコスクールであることから交渉が進展し、一気に実現の運びとなった。交流では、学校紹介の後、両校生徒が小グループに分かれ、各自の探究課題を発表し合った。続いて行われたディスカッションでは、その内容に関して活発に意見を交換。深い友情を育むことができた。



② 「近畿ユネスコスクール子ども宣言」作成

2020年11月、3日間にわたって開催されたユネスコスクールオンライン近畿地方大会子ども会議に本校生徒の代表9名が参加した。

子ども会議とは、「近畿ユネスコスクール子ども宣言」作成を最終目的として、近畿のユネスコスクールに通う児童・生徒とともに持続可能な学校・地域社会・世界づくりに向けた取り組みについて考える場のことで、当日は、奈良教育大学の学生の皆さんや他校の生徒の皆さんと一緒に自分たちの活動を紹介し合い、ESDにつながる取り組みをどのように作っていくかについて話し合った。

3日間の討議の末、「近畿ユネスコスクール子ども宣言」が完成。参加した生徒は、本校のGRITをはじめとする、世界市民教育プログラムで培ってきた力を最大限に発揮することができ、改めて同プログラムの成果を実感する大会参加となった。

③ 高校生カンボジアオンラインスタディツアー

昨年8月6日・7日の二日間にわたって行われた日本ユネスコ協会連盟主催のイベント 2022年度 高校生カンボジアオンラインスタディツアーに本校生徒の代表4名が参加した。

このイベントは、カンボジアに暮らす人々との交流を通して、教育・国際協力の視点からカンボジアが抱える諸課題を学び、国際理解を深めることを目的としたもの。現地の学校に通えない子どもたちを支援する施設の授業見学や、そこで学ぶ子どもたちと交流した。今後、参加者自らが学んだことをアクションに移し、その取り組みを学校内外にも発信する運びとなっている。

④ SDGs（持続可能な開発目標）達成への取り組み



My SDGs in Action

**SDGs達成推進のための、
自分に実行可能な目標を
考えよう！**

 関西創価高等学校

 SUSTAINABLE DEVELOPMENT GOALS



ユネスコスクールが、ESDの推進拠点として位置付けられていることから、SDGs（持続可能な開発目標）の学習をカリキュラムに取り入れたいとの声が教員間で上がるようになった。SDGsの理念である「誰も置き去りにしない」社会の構築は、本校の平和教育の指針「他人の不幸の上に自分の幸福を築くことはしない」に通じる。各教科の授業でSDGsについて学んでいる生徒たちは、GRITの探究テーマとして、SDGsを踏まえたものを選ぶようになっている。

SDGsをより深く学ぶために、SDGsの第一人者である、稲場雅紀さん（アフリカ日本協議会 国際保健部門ディレクター）に講師をお願いし、「SDGs 先の見えない時代から新しい時代への道しるべ」と題して、2021年度のGCS（グローバルシチズンシップセミナー）を開催した。専門家の視点からSDGsに取り組む意義について語っていただいたことで、想定以上の大きな刺激となり、生徒の意識変革につながった。

2022 年 10 月、「地球環境を保全でき、持続可能な社会づくりの担い手となる人間を初等中等教育の段階から育成することを目指す」との ESD の理念に基づき、交野市県境衛生課や交野市環境基本計画推進会議と連携して、里山保全を目的とした竹林整備を行った。本校の所在地である交野市では、放置竹林による生態系破壊が進んでいる。その一方、里山保全の担い手は高齢化が進んでおり、整備が十分にできていない状況にある。そこで、地域連携・地域貢献とともに SDGs のターゲット 15 「陸の豊かさを守ろう」の学習も兼ねて、交野市内の里山保全の活動に取り組むことを開始した。これまで、活動時間の確保と活動の継続が課題であったが、クラブ引退後、進路が確定した高校 3 年生を中心に行うことで課題克服の目処がついた。今後は、交野市と連携しながら市内の小中学校にも声をかけ、継続的に自然環境の保全を推進していきたい。



3. 成果と課題

本年度も 1 年次、2 年次の学びの上に、3 年次において「世界を一つにする力」をテーマに、世界市民教育の集大成として、3 年生全員で、約 90 ヶ国の国連大使となり模擬国連に取り組んだ。生徒たちは見たことも聞いたこともない国を担当し、その国の実情を知り、文化や宗教について学ぶことで、自分たちの知っている「世界」がいかに小さなものであるかに気づいた。また、日本語で得られる知識はわずかで、英語ができなければ調べられないことが多く、世界市民としては語学力が必須であることに気づき、英語学習への意欲が高まった。

模擬国連を通して、「気候変動」や「核廃絶」のような問題には各国の事情や正義があり、簡単には解決へと進まないことを実感。自分たちの無力さを思い知らされ、各国の「合意形成」がいかに難しいかを学んだ。一方、世界に貢献することの意義の大きさも学んだ。その意味では 11 ヶ月という長い期間をかけての「学年模擬国連」を、生徒のリーダーを中心に運営できたことは、世界市民育成プログラムとしての大きな成果ではなかったかと考える。

本校の最大の課題であった、社会への実際の行動という部分では、2 年次に実際に社会貢献などに取り組む企業や自治体、NGO のもとへ全グループがフィールドワークを行い、様々なアドバイスや協力を得て、自分たちなりの解決方法を、コンクール等を通じて発信できたことは大きいと考える。また、世界的な課題だけではなく、自分たちの足元に起こっている地域の課題について、交野市の環境衛生課やみどりネットという NPO 団体とともに、自分たちの手で解決に向けての行動を始めることができた。課題は山積している状態ではあるが、一つひとつ克服しながら、これまでの世界市民育成プログラムで得た成果を地元地域に還元し、地域とともにさらなる発展を目指したい。

ベスト・アクティビティ賞

愛知県立愛知商業高等学校

教諭 梶原 英彦

教諭 柘植 政志

「ミツバチ×地域×商業」～地域貢献と SDGs～

1 はじめに

2010 年に本県で生物多様性条約第 10 回締約国会議 (COP10) が実施された。こうした経緯からも、本県で生物多様性の保全を考える取組が必要であった。そうした経緯から、名古屋市東区徳川周辺の理解と「文化のみち」の持続可能な街づくりに貢献するため、2011 年より「なごや文化のみちミツバチプロジェクト」を立ち上げ、校舎屋上で養蜂活動を開始した。ミツバチは、農薬汚染がなく、花や緑も多い場所でしか生育できない環境指標生物であり、この学びを多くの方に伝えるため、はちみつを活用した商品開発や、地域のお店で使用してもらうための発信、保育園児や小学生を対象としたミツバチ観察会・採蜜体験、公開イベントへの参加などを行うことで生物多様性の保全を学習している。



【なごや文化のみちミツバチプロジェクトの概要】

2 実践内容

学習内容を多くの人に伝えるきっかけを作るために商品を通じてメッセージを発信した。2012 年地元名古屋市が、東日本大震災により大きな被害を受けた岩手県陸前高田市を「丸ごと支援」していることを知り、生徒達は、校舎屋上で採れたはちみつを使用した商品を企画した。そこで、地元企

業アイスクリーム工房ぶらんぼんに依頼し、「徳川はちみつ」と陸前高田市の特産品「米崎りんご」を使用したアイス「希望のはちみつりんご」を協働で開発した。「名古屋と陸前高田を繋ぐ希望の架

け橋になってほしい」という生徒達の想いが込められたこの商品は、売上 1 個につき 8 円が「陸前高田市小中学校復興基金」に寄付される仕組みとなっており、教育環境の整備や教育の振興に充てられる。このように、被災地支援と蜂蜜を組み合わせることで、被災の状況や生物多様性の保全を自分事として考える商品とし、現代的な課題を同時に解決することができた。



【生徒企画・開発商品「希望のはちみつりんご」】

2015 年からは F D A と協働し、震災を風化させないために毎年 3 月に名古屋・陸前高田の便の搭乗者に提供し、名古屋市内店舗での常設販売やイベントでの販売の他、陸前高田市内での販売も実現し、2016 年には、陸前高田市の「ふるさと納税の返礼品」として採用された。販売開始から 5 年後の 2018 年には、総売上個数が 10 万個、寄付総額が 80 万円を超え、名古屋と陸前高田を繋ぐ希望の架け橋としての役割を果たすなど、多くの関係者が共感し、行動に移していることから行動変容の連鎖をもたらしることができた。こうした取組の成果からまた多くの方にお声かけいただくなど更なる連鎖をもたらししている。

陸前高田産リンゴ+屋上ハチミツ

メーカーと開発、商品化

愛知商高が支援アイス

東区川の愛知商業学校の生徒が、日本最大の被災地、岩手県陸前高田市に、校舎で育てたハチミツを配合させたアイスクリームを開発、商品化した。名産品の「マルハチ」と「ハチミツ」にちなみ、売り上げ一割を八円を陸前高田市に寄付する。

売り上げ1個当たり8円寄付

手掛けたのは、地域活性化の努力で、同校が、市が「丸ごと支えない」気持でこの活動について学ぶ。「徳川はちみつ」産地である陸前高田市でも、同校が「マルハチ」と「ハチミツ」を配合させたアイスクリームを開発、商品化した。名産品の「マルハチ」と「ハチミツ」にちなみ、売り上げ一割を八円を陸前高田市に寄付する。

陸前高田産のリンゴと学校でとれたハチミツを配合させたアイスクリームを開発、商品化した。愛知商業学校の生徒が、日本最大の被災地、岩手県陸前高田市に、校舎で育てたハチミツを配合させたアイスクリームを開発、商品化した。名産品の「マルハチ」と「ハチミツ」にちなみ、売り上げ一割を八円を陸前高田市に寄付する。

【2014年2月13日 中日新聞朝刊】

支援のアイス 返礼品に

愛知商高生開発 陸前高田市ふるさと納税

東日本大震災大被害を受けた岩手県陸前高田市に、愛知商業学校（東区川）の生徒が支援のアイスクリームを開発、商品化した。名産品の「マルハチ」と「ハチミツ」にちなみ、売り上げ一割を八円を陸前高田市に寄付する。

アイスクリームは、陸前高田市の「マルハチ」と「ハチミツ」を配合させた。名産品の「マルハチ」と「ハチミツ」にちなみ、売り上げ一割を八円を陸前高田市に寄付する。

陸前高田市の「マルハチ」と「ハチミツ」を配合させた。名産品の「マルハチ」と「ハチミツ」にちなみ、売り上げ一割を八円を陸前高田市に寄付する。

【2016年5月12日 中日新聞朝刊】

他にも、名古屋市内でフェアトレードに関する取組が少しずつ盛り上がりを見せていた中で、ユネスコクラブとしても協力できないかと考えた。世界に視野を広げた活動をしたという想いから、ESD（持続可能な開発のための教育）の学習を行う中で、世界の緊急課題が貧困・環境問題であり、課題解決の方法の一つが「フェアトレード」であることを知った。そこで、地元企業アイスクリーム工房ぷらんぼんと協働で「徳川はちみつ」とガーナ産「フェアトレードカカオ」を使用した、幸せ運ぶフェアトレードアイス「幸せのはちみつカカオ」の商品開発を行った。「世界中の人が幸せに暮らせる未来のために」という想いから、売上の一部が「フェアトレードプレミアム」という奨励金として、ガーナの農業発展や教育支援に当てられる仕

組みを取り入れた。これらの2つのアイスは、2014年に名古屋市で開催された「持続可能な開発のための教育に関するユネスコ世界会議」の日本政府主催歓迎レセプションパーティーの公式デザートとして採用され、世界各国の閣僚にアイスに込めた想いを伝えることができた。こうしたフェアトレードの取組は、2015年9月には名古屋市が日本で2番目となるフェアトレードタウンとして登録される一助になるなど、学校や地域の取組におけるリーダー的存在として、関係機関からも視察が行われている。

環境指標生物であるミツバチと、復興支援やフェアトレードを組み合わせた商品開発によって、ミツバチの生態系の保全に関するメッセージを打ち出すだけでなく、世界的な課題解決や地域の持続可能な街づくりを生み出す、これからの未来を見据えた取組である。



【生徒企画開発商品「幸せのはちみつカカオ」】

アイスで貧困問題発信

愛知商業高 ESDの夕食会で提供へ

名産品の「マルハチ」と「ハチミツ」を配合させた。名産品の「マルハチ」と「ハチミツ」にちなみ、売り上げ一割を八円を陸前高田市に寄付する。

陸前高田市の「マルハチ」と「ハチミツ」を配合させた。名産品の「マルハチ」と「ハチミツ」にちなみ、売り上げ一割を八円を陸前高田市に寄付する。

陸前高田市の「マルハチ」と「ハチミツ」を配合させた。名産品の「マルハチ」と「ハチミツ」にちなみ、売り上げ一割を八円を陸前高田市に寄付する。

【2014年11月7日 中日新聞朝刊】

こうした取組から、SDGsにも目を向け、その一つである「12. つくる責任、つかう責任」に関心を持

ち、調べてみた結果「エシカル消費」が「つかう責任」と深い関わりがあり、これまで行ってきた活動は全てエシカルな行動であることを知った。これまで活動してきた私達だからこそ伝えられるものがあると考え、エシカル消費と近年の消費傾向「コト消費」を組み合わせたイベントを通して、エシカル消費の普及・推進に取り組むことにした。

株式会社 JTB と協働で「エシカル消費を体験していただく日帰り観光ツアー」の企画や、フェアトレードローズを使用した、母の日に贈るミニブーケ作りイベントの企画運営を行うことでエシカル消費を体験してもらう取組を行うことができた。

愛知商業高校ユネスコクラブプロデュース
“文化美人”へのみちを歩こうツアー 第4弾
文化のみちを巡る

自分磨きの旅

2017.1.21(Sat) 日帰り 昼食付き

集合場所:名古屋駅 観光案内所 午前10時
旅行代金:おひとり様3,000円(税込)おとな・子ども同額
※当日前夜交通費210円必要になります。

集合 10:00
名古屋駅 観光案内所
1 名古屋駅 観光案内所
2 徒歩 文化のみち 榎本館
3 ナチュラル コスメ作り
ミツバチが作った「みつろう」を使用した天然ハンドクリーム作りを体験します。講師にはアロマセラピーインストラクターの方をお招きします。

解散予定 15:00頃

テーマは「エシカル」
おもてなし、お互い様、思いやりの気持ちであり、人や社会、環境や地球など全てにやさしい考え方や行動を目指します。

1 オーガニックランチ
無農薬・朝採れの新鮮野菜にこだわった美容に良い料理をお召し上がりいただけます。私達の開発商品を使用したツアー限定メニューもお楽しみください。

2 “和やか茶会”
気軽に楽しくお茶会に参加します。ハートの器を使い松尾流松尾宗全先生とともに「楽しみながら行う茶道」を体験します。

愛知商業高校ユネスコクラブ
私たちユネスコクラブは学校周辺に広がる名古屋近代化の歴史遺産が数多く残るエリア“文化のみち”のまちづくりに貢献するため観光の3要素(観る・食べる・遊ぶ)のうち“文化のみち”に少ない遊ぶ要素の開拓にチャレンジしようと思い地域通貨「はにかむコイン」を考案しました。第4弾では、はにかむコインを使用してエシカルの視点から、女子総合力を向上させる“文化のみち”の新しい楽しみ方を提案します。

他にも、2017年8月には、穀菜発酵料理研究家の方と協働で「親子で楽しむ料理教室」を企画し、愛知県産の玄米「あいちのかおり」、特産品「いちじく」、屋上で採れた「徳川はちみつ」を使用したタルトを作成した。いちじくを皮ごと使用する等、ごみ排出の削減にも取り組み、食を通してエシカル消費の発信することができた。イベント後の追跡調査では「料理教室後もエシカル消費を意識している」と回答した方は半数以上となり、イベントを通して、消費行動を変えることができた。

愛知商業高校ユネスコクラブプロデュース
de
親子 楽しむ
エシカルクッキング

平成29年7月8日(土)

時間 14時～16時
場所 ヘルシングあい
(名古屋市中区城西2丁目15番地13号)
参加費 1組 2,480円
定員 10組(先着順)
対象 親子(小中学生のお子様とお母様)
持ち物 エプロン、三角巾
講師 古澤久美様(穀菜料理研究家)

お申し込み方法
件名「料理イベント申し込み」
本文「氏名、年齢、連絡先」を記載し上記までお送り下さい。

あいちのかおり
いちじくとはちみつの玄米タルト
※ドリンク(いちじくミルク)付き

愛知のお米「あいちのかおり」の玄米と甘味がたっぷりつまった愛知県産「いちじく」をふんだんに使用し、校舎屋上で採れた濃厚で香り高い「徳川はちみつ」をトッピングしたタルトを作ります。レシビ・試食・講師の方のお話付き!!作ったタルトは持ち帰りができます。

テーマは「エシカル」
おもてなし、お互い様、思いやりの気持ちであり、人や社会、環境や地球など全てにやさしい考え方や行動。

愛知商業高校ユネスコクラブ
2011年より校舎の屋上でミツバチを飼育しています。ミツバチを核として名古屋都心の自然環境の向上・商品開発など多分野にわたって活動しています。

【左：株式会社 JTB 様と協働イベントチラシ
右：エシカルクッキングのイベントチラシ】

「エシカル」な考え 広めたい

愛知商業高校 8日に親子料理教室

愛知商業高校(名古屋市中区)のユネスコクラブの生徒たち、関係者に伝播する「エシカル」という考え方を広めようと、料理教室「親子で楽しむエシカルクッキング」を8月1日に開催しました。講師には、愛知商業高校のユネスコクラブの生徒たち、関係者に伝播する「エシカル」という考え方を広めようと、料理教室「親子で楽しむエシカルクッキング」を8月1日に開催しました。

調理・イチャイカや高校で採った徳川はちみつを使用した料理教室を開催したユネスコクラブの生徒たち(一学年)と関係者(関係者)が参加しました。

「エシカル」とは、環境や社会に配慮した消費行動のことです。今回は、愛知商業高校のユネスコクラブの生徒たち、関係者に伝播する「エシカル」という考え方を広めようと、料理教室「親子で楽しむエシカルクッキング」を8月1日に開催しました。

調理・イチャイカや高校で採った徳川はちみつを使用した料理教室を開催したユネスコクラブの生徒たち(一学年)と関係者(関係者)が参加しました。

【2017年7月8日 中日新聞朝刊】

他にも、ミツバチの働きを子ども達に身近に感じてもらうために絵本を発刊し、地元地域への寄付や読み聞かせを行うことで生物多様性保持の必要性を訴える活動も実施した。名古屋市東区の「スモールアクションプロジェクト」では、学校の花壇だけでなく地域の花壇と一緒に整備することでミツバチの蜜源を確保する活動を区役所に提案し、花で「人」「地域」「ミツバチ」の全てが幸せになれる、持続可能な街づくりに向けて活動を継続し、フェアトレードのバナナペーパーや端材を使ったイベントも実施するなど、環境に配慮した取組や啓発活動を実施している。



【ミツバチ関連の生徒企画・開発絵本】



【2020年8月12日 中日新聞朝刊】



【2021年4月6日 中日新聞朝刊】

愛知県は持続可能な社会の実現に向けて、人や社会、環境に配慮した商品やサービスを選んで消費する「エシカル消費」の理念を、広く普及する活動を実施しているが、2021年11月7日には愛知県知事による「エシカルあいち宣言」がされるなど、より一層愛知県内での取組を深めていくことを目指している。こうした状況に対して、エシカル消費に関する取組を実施してきた私達は、エシカル消費を知り、伝えるだけでなく、その取組を継続して実施してもらえる人を増やしていきたい。



【エシカル消費に関連した商品を販売の様子】

以前は生物多様性の保全や地域に貢献する商品開発を中心の活動を行っていたが、その後、ESDの学習からフェアトレードの制度を活用した商品開発やイベントの企画に広がり、SDGsの取組からエシカル消費の視点を広げることができた。これらの取組から校内でも商品開発やSDGsの取組を考

える活動が広がり、屋上養蜂による地域貢献と生物多様性の保全から、多角的な視点で考えることができるようになった。単に生物多様性の保全や、フェアトレード、エシカル消費という取組ではなく、それらの要素の段階的な広がり、複合的に組み合わせた取組は持続可能な取組である。これらの要素を学んだ生徒達を育成する本取組は、正に持続可能な街づくりを目指した、地域に貢献する未来の実践者の育成している。



【コロナ禍におけるバナナペーパーや端材を使用したイベントの様子】

3 成果と課題

被災地や発展途上国の現状を伝えることで「倫理観」を養い、その現状に対して具体的なアクションを起こす「行動力」を育むことができた。実際に、コロナ禍の中でミツバチの働きを子ども達に身近に感じてもらうために絵本を発刊し、地元地域への寄付や読み聞かせを行うことで生物多様性保持の必要性を訴え、名古屋市東区の「スモールアクションプロジェクト」では、学校の花壇だけでなく地域の花壇と一緒に整備することでミツバチの蜜源を確保する活動を区役所に提案し、花で「人」「地域」「ミツバチ」の全てが幸せになれる、持続可能な街づくりに向けて活動を継続している。

今後は継続したSDG sの目標達成を目指し、「生物多様性保全」と「販路拡大」を目指している。

「生物多様性の保全」については、ミツバチが快適に生きられる地域作りが必要だと考えていることから、農薬汚染がなく、花や緑を増やしていくことが必要であると考えられる。ミツバチの生育状況

を随時発信することで、地域の人が自分達だけでなく、ミツバチと共に生きる街を作っていけるようなアプローチを行っていききたい。

そのための手法の一つが「販路拡大」である。蜂蜜を使った商品をより消費者の身近な商品にすることによって、自分自身の口に入るものを考えるきっかけになると考えられる。自分自身が消費する蜂蜜を改めて考えることによって、農薬汚染がなく、花や緑の多い地元地域に誇りを持ち、住み続けられる街づくりを提案したい。



【はちみつを使用した生徒企画アイスクリーム】



【持続可能な街づくりを目指した、地域に貢献する未来の実践者の育成 概念図】

※上記に使用している中日新聞の記事は中日新聞社の許諾を得て転載しています。

審査員特別賞

東京都 八王子市立横山第一小学校
校長 緒方 礼子

持続可能な地域づくりをめざして～地域学習を通したSDGｓの2年間の取組より～

1 はじめに

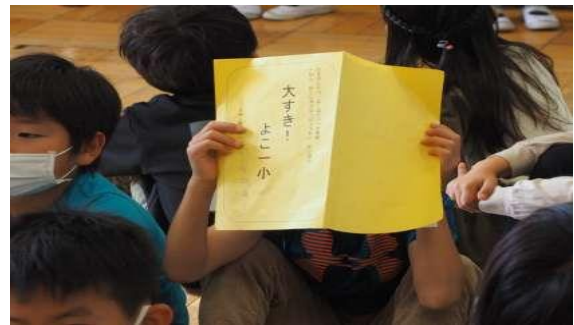
八王子市は、高尾山を始めとする自然や、桑の都として栄えた養蚕や織物の歴史、車人形などの文化遺産を評価され、令和2年度に「日本遺産」として認定された。これを受け、八王子市の公立小中学校では令和3年度より「郷土学習」を教育課程に組み込み、重点的に指導をすることになった。

本校では、以前より全学年の発達段階に応じた地域学習に取り組んできたが、令和3年度は系統的な地域学習となるよう計画を見直し、11月に発表会を行うこととした。1年生は学校調べや学校で働く人との触れ合いをまとめ「大好き！ 横一小」をテーマに劇化して発表した。そして、2年生は「まちたんけん」、3年生は「八王子調べ」と、学校の周りから八王子市全体へと地域を広げ、体験を通した学習を進めてきた。さらに、4年生は夏季休業中に「八王子桑都カルタ（八王子市の自然や文化、歴史をカルタにまとめたもの）」を覚えたり、その場所を実際に訪れたりする活動に取り組み、学習用端末を使ってプレゼンテーションにまとめた。5年生は社会科と関連させて「八王子の農業」、6年生は八王子市の産業や文化、自然等を7つのテーマに絞り、八王子の魅力をプレゼンテーションした。

こうした調べ学習や体験学習を基に、令和4年度は、私たちの住む八王子をよりよい地域にしていくためにできることを考えようと学習を発展させることにした。そして、「地域学習」の目標を「八王子の未来を担う児童の育成～地域を愛し、地域を大切にする子の育成をめざして～」と設定した。そして、学習を進める中で、持続可能な街づくりをすることが、様々な課題を解決すること

につながると考え、SDGｓの視点を入れた学習に取り組むこととした。今回は、特に、4年生と6年生の実践を取り上げて紹介したい。

地域学習発表会の様子より



1年「大好き！横一小」練習風景



3年「八王子の鳥 おおるり」の紹介場面



4年「八王子桑都カルタより」の紹介場面

2 実践内容

(1) 4年生の取り組み

①湯殿川探検隊

4年生は総合的な学習の時間の年間指導計画に地域学習を関連させた環境学習を設定し学習を進めた。

1学期は学校の南側を流れる湯殿川を題材に「湯殿川探検隊」というテーマを設定した。

第1次では西部地区環境市民会議の委員の皆様が協力していただき、湯殿川に生息する水辺の生き物について生態調査を行った。「八王子の川と仲良くなるノート」も活用しながら調べ学習を行い、川にはさまざまな種類の生き物がいることを知ることができた。「湯殿川についてもっと知りたい」という意欲を高めるきっかけとなった。



続く第2次では、地域の方へのインタビューやアンケート調査を実施し、地域の人にとって湯殿川はどういう存在なのかということを考えさせた。その際、ごみ問題にも目を向けさせ、現地調査を行った。



そして「湯殿川探検隊」の学習から分かったことを、湯殿川の「よいところ」「よくないところ」「おもしろいところ」という視点を与え、意見を出し合いグループごとにまとめた。

「よいところ」では、「いろいろな生き物がいること」「きれいな川であること」「地域の人たち

の散歩コースになっていること」などが挙げられた。中でも、ここ数年の間で川がきれいになり、ホテルが見られるようになったことを地域の方からお聞きし、地域の方にとって憩いの場になっていることなどが話題になり共有された。

「よくないところ」では、多くの子供たちが「ごみが落ちているところ」を挙げていた。また、「深いところがあって危険な場所がある」「川の流れが急なところがある」といった、子供たちが実際に川で遊んだ経験や目にしたこと、聞いたことから意見を出していた。

さらに「おもしろいところ」では、「珍しい魚や鳥がいる」「昔、ゾウの化石が出たと聞いたことがある」など、調べたことや学んだことを生かした発言も多く見られた。



それぞれの考えを付箋に書いて、似ている意見をまとめたり、新たな気づきを共有したりする姿が見られた。

湯殿川は子どもたちにとって身近な自然であり、様々なことを教えてくれる川であることが再確認された。そして、この身近な自然を守っていききたいという考えが生まれ、「ずっときれいな川でいてほしい」という願いをもつことができた。



②地域学習発表会

子供たちは、夏休み中に自分の興味をもったことをさらに探究する「課題別学習」に取り組んだ。2学期に入りそれぞれが調べてきたことを共有する中で、ますます湯殿川への興味関心が高まった。そして、湯殿川の自然を守っていくために自分たちにできることはないだろうかと考え始めていた。そして、自分たちの考えを多くの人に聞いてもらいたいという思いをもち、保護者・地域の方を招いて発表会を行う計画を立てることになった。



発表会の場を学校公開の日に設定し、グループごとに準備を進めた。そして発表本番では、湯殿川を今のままきれいな川に保つためにできることや、湯殿川に生息する鳥や魚、小動物を守るための自分たちの考えを多くの方の前で発表した。

参観に訪れていた西部地区環境市民会議の委員の方から、「君たちの発表を聞いて、湯殿川がいつまでもきれいであり続けると確信できた。」と称賛の言葉をいただいた。また、保護者からも、「自分たちが住んでいる地域の川に、これだけのよいところがあることは知らなかった。子供たちが様々な視点から地域学習を進めていて感心した。」という感想をいただいた。

ある子供は「今まで普通の川だと思っていたけれど、生き物もたくさん住んでいるし、ホテルも見られる貴重な川だということも分かったし、地域の宝だ。」と振り返った。こうして、本単元を通して多くの子供たちに、身近な環境に対する考えの変容が見られた。



③「2050年の八王子の姿」のポスター作成

4年生は、「湯殿川探検隊」の学習から学んだことを発展させ、私たちの町「八王子」の環境問題にも目を向け、環境保全や地球温暖化防止の観点から「2050年の八王子の姿」を想像し、ポスターにまとめた。

そこには、SDGsの17の達成目標を意識した資源の有効利用や食品ロスを減らすアイデア、プラスチック問題など自然を守るためにできることを呼びかけるもの多く見られた。中でも一番多かったのは、私たちの町のシンボルでもある高尾山の自然が2050年も今のまま残っていてほしいという願いだった。

子供たちは一連の学習を通して、環境問題を自分事として捉え、そのために自分たちでできることを主体的に考えようとする意欲が高まったと感じた。

子どもたちにとって、地域は一番身近な環境である。そして、地域を題材にしながら課題を発見し、追及する学習活動が、「持続可能な地域づくり」の担い手としての資質・能力の育成につながったと考える。





(2) 6年生の取り組み

①SDG s コンテスト

6年生の地域学習では、これまで6年間学習してきた地域学習を振り返り、「八王子再発見」をテーマに設定して取り組んだ。そして、八王子の魅力を7つの視点からスライドにまとめ発表した。テレビ局から発信するという想定で、工夫を凝らしたプレゼンテーションを行った。

自然豊かで、昔からの伝統・文化が受け継がれてきた我が町八王子に愛着をもつだけでなく、産業や自然環境、そして現在の市民生活の中で私たちが直面している様々な問題について課題意識をもち、学習を発展させていった。

その一つが、7月に行われた東京工科大学主催のSDG s コンテストへの参画だった。「科学の力をSDG s に役立てる」をコンセプトに身近な問題を解決するためのアイデアを募集する企画で、4名の児童が優秀賞に選ばれた。



東京工科大学 SDG s コンテスト授賞式の様子

②われら SDG s 大臣

2学期の総合的な学習では、さらにSDG s について深めるため、17の達成目標と現状、そして、2030年までに目標を達成するための

取組について考える学習に取り組んだ。

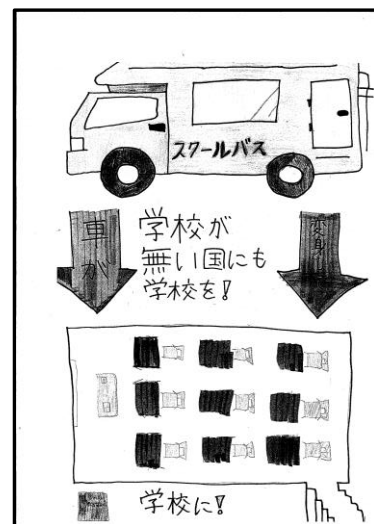
「もしも自分がSDG s 大臣だったら」をテーマに、自分が解決したい目標を決め調べ学習を行った。そして、その課題解決のために、一人一人がSDG s 大臣となり、どんな政策を行っていくか、そして、どんな技術を開発すれば解決できるかについて考えさせ、新聞にまとめた。

子どもたちは自由な発想で楽しみながら学習に取り組んでいた。最初は、夢物語のような発明品が多数見られたが、日本や世界の現状を調べまとめる中で、より現実的で実現可能な対策を考えるようになっていった。

子どもたちの作品をいくつか紹介する。

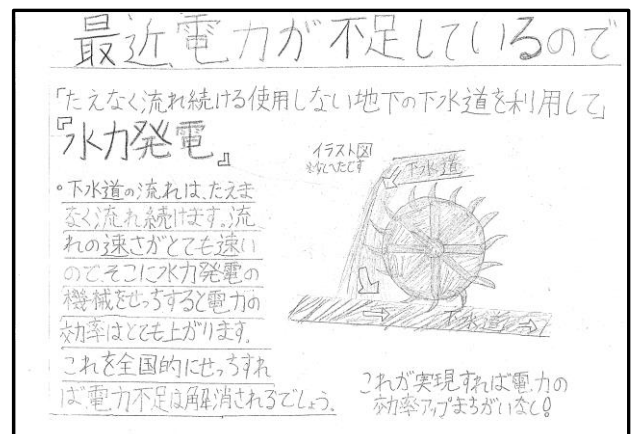
①スクールバスを教室にする

- ・スクールバスの中をそのまま教室として使えるよう、机といすを設置する。
- ・学校がない地域でも、学校がその地域に移動していき、誰もが学習を受けられるようにする。



②下水道を使って水力発電

- ・下水道の流れの勢いを活用して水力発電を行う。電力不足の課題が解決できる。



3 成果と課題

地域学習の取組が「持続可能な地域づくり」につながっていくことを学習を通して理解し、そこからSDGsと関連付けた学習へと発展できたことは、子供たちにとって大きな学びとなった。また、体験学習を重視し、交流活動を通して多様な考えに触れ、考えを広げ深める学習を重視することで、地域の課題を自分事として捉え、主体的に解決しようとする意欲が育ったと感じる。

さらに、学習を進めるにあたっては、コロナ禍を逆手に取り、「できない」とあきらめるのではなく、「どうしたらできるか」を常に考えさせることで、子どもたちの創意工夫する力が伸びた。そこで大いに活躍したのは令和3年度に全校配置された学習用端末だった。直接体験できないことはタブレットを使って調べたり間接的に体験をしたりするアイテムとして活用することで、操作・活用能力が急速に向上したことも成果の一つである。

「持続可能な地域づくり」の取組を進めていくためには地域の方の参画が必要である。地域の未来を担う児童の育成は地域住民の最大の目標だからである。そこで、地域運営学校である強みを生かし、学校支援地域本部を中心とした学校と地域が協働した企画・運営をしていくことで、学習活動を継続・発展させることが重要である。そして何より、「地域の課題を共有し、地域とともに子供を育てる」という地域全体の意識をさらに醸成していくことを今後の課題としたい。

4 おわりに

冬休み明けの1月のある日。6年生の児童が3名、校長室を訪れた。お願いがあるということで話を聞いてみると、これまでのSDGsの学習で学んだことを全校に発信したいという申し出だった。自分たちでスライドを作り、「どうしてそのように考えたのか」、「どのような内容にしていくか」についてプレゼンテーションす

る姿に面食らうとともに、この学習が子供たちに与えた影響の大きさに驚かされた。子供たちは教師が意図するよりもたくさんを感じ、学び、その学びを広げたいと考えていることが分かりうれしくなった。

大きな目標を達成するときに、「一人の百歩より、百人の一步」と表現されることがある。八王子市立横山第一小学校の全校児童510人の小さな一歩が、目標を達成する大きな力になると信じている。



生徒の自由な発想による社会アクション・プログラム

燈台の光プロジェクト Be Leaders

1. はじめに

(1) 教師が教えることをやめた

カトリックのミッションスクールである本校では、創立以来伝統的に社会奉仕活動と人権教育に力を入れてきた。生徒会が発足した1967年には、奉仕委員会が「Love is Action」を合言葉に、地域における入院患者への慰問、高齢者施設、児童養護施設でのボランティア、大阪西成区での炊き出し、夜回りなどの支援を行ってきた。12年前からは生徒会の呼びかけにより、月に一回の粗食を実践し、フィリピンの子供の教育支援にあてている。

また近年には、中学1年生がコースやクラスの枠を超えて共に体験する※1クロススタディによって、自由な発想力や思考力を養うプログラムを展開しており、その経験が中学2年から高校での探究学習に生かされている。

その他、総合的な探究や全校行事として、ケニアのスラムで学ぶ子供たちと ZOOM でのオンライン交流、海洋プラスチックごみ問題をテーマにした外務省「高校講座」、東京大学「One Earth Guardians 育成プログラム」についての講演、大学生との ZOOM 交流など、世界を知る機会を設けてきた。

生徒たちは、このような校風の中で、「社会に奉仕することは素晴らしいこと」と捉え、教師の呼びかけがあれば、様々なプログラムに積極的に参加している。

※1 クロススタディ 近年のテーマ

カイコ的一生。	DIY入門。
クレイアニメ。	パラ・スポーツ体験。
ゲームプログラミング。	ビッグヒストリー。
ブランディング・マーケティング。	
クンクーシュで学ぶ難民問題。	

しかし、これらのプログラムのほぼすべてを教師が準備していたため、生徒自らがアイデアを生み出し、実践するという主体性が育ちにくいという問題点があった。そこで思い切って、教師が教えるのではなく、あくまできっかけを作ることだけに専念し、生徒の自主性を伸ばすためのサポーターとなることを決めた。そうして生まれたのが「燈台の光プロジェクト Be Leaders」である。

(2) 「燈台の光」というビジョン

賢明女子学院の教育理念に、社会を明るく照らす「燈台の光」となるというビジョンがある。一人一人が身近なところで希望の建設者となり、リーダーシップを発揮する。これは、誰一人取り残さない社会の実現に向けたESD、またSDGsの目標にもつながるものである。



そこで、2019年度より、教員5名がチームとなり、SDGsの目標実現に関心がある生徒を募集したところ大きな反響があり、約40名が集まった。

最初の話し合いの際に、生徒たちがキラキラとしたまなざしで楽しそうに自分の思いを語っている姿が印象的で、中には奇想天外な案を提案する者もいた。しかし常に教員が大事にしたことは「否定しない」ということである。とにかく、生徒が自由に考え、行動する場を設けようと努めた。

つまり、教員が示した「燈台の光」というビジョンを生徒に投げかけることによって、生徒自らが考え、学び、行動する全く新しい形の有志グループが誕生したのだ。

2. 実践内容

(1) 活動の特徴

①初動期（2019年～2020年度）

活動初年度に生徒が企画したものは、校内におけるSDGsの普及活動が主であった。お昼の校内放送、ポスター掲示、ベルマーク収集、映画鑑賞会などである。そこに教員が提案した弁論大会、講

師を招いての学習会などを加えていった。

また、2019年に熊本で行われた女子高校生サミット「ガールズパワーがこの世界を変えていく」にメンバーの高校2年生5名が参加し、ジェンダー問題についてプレゼンを行った。大会後に校内で行ったプレゼン発表では、在校生からの質問が次々に飛び出し、発表者と全校生が活発な議論を行った。この対話的な雰囲気会場が大いに盛り上がり、低学年は上級生の積極的な姿勢にあこがれ、活動に対する関心や意欲を持つきっかけとなった。

この時期は、学年を超えた連携という点ではまだうまく機能していなかったが、上級生のリードによって中学生も徐々に自分の意見を出しながら活動していた。

②発展期（2021年～2022年度）

Be Leadersの活動が校内で定着し広がるとともに、メンバーの生徒たちは、うまく友人たちや教員を巻き込んで活動するようになった。

「先生、そろそろ皆を集めて話をしたいので部屋の予約をお願いします。」「先生、ポスターを作ったのでみんなに配信してもらえませんか。」「今度のイベントの小道具は、メンバーじゃない子が協力してくれるそうなのでお願いしておきました。」と、完全に生徒のペースである。

生徒たちは、自分がやりたいことを見つけ、話し合い、企画書を作成し、教師や他のメンバーに説明し実行に移す。このような経験を通して、発信力、他の人と協力するやり方を学んでいった。

③ひとつの疑問がつながりの力へ

生徒たちは一度疑問を抱くと、まずそのテーマについて調べ始める。「世界における貧困問題と日本における貧困の原因は何か」「海洋プラスチックごみ問題はどのくらい深刻なのか」など。タブレットを使ってネット検索で調べ始めるが、10万冊の蔵書を誇る校内図書館は大きな味方だ。子供向けの入門書から大人向けの専門書まで幅広く書籍を使ってまとめ作業を行う。時にはホワイトボードいっぱい図式化し、議論しながらポイントをつかんでいく。

また、2021年度に活動した調べ学習班は、

経済産業省のSTEAMライブラリーのビデオ教材「白亜の城を守れ」制作に協力した。まずはお城を訪れフィールドワークを行い、そこで見聞きしたことをまとめて疑問をピックアップする。例えば、姫路城のシンボルカラーである白について漆喰職人、デザイナーの方々にインタビューを行い、内容を掘り下げていった。半年かけて出来上がった作品は、姫路市内の小中学校の教材としても利用されている。

このように、少しずつ地域の人とのつながりが生まれ、生徒たちの意識が身近な社会へと広がっていった。一人の疑問を他の人と共有し、共通体験を通して得られる「つながり」の力に生徒自身が気づいてきたのも発展期の特徴である。

（2）今年度の主な活動

今年度は、中学1年生から高校2年生まで65名が所属し、メンバーは基本的にいくつかの班に分かれて活動するが2、3の班を掛け持ちする生徒もいる。また、グループ全体に呼びかけて取り組んでいる活動もある。以下に今年度の主な活動例を9つ紹介する。

①「ワールドドリームツアー」ベルマーク班

ベルマーク班は、全校生徒に対しベルマーク回収による社会貢献について啓蒙活動を行っている。

学期ごとに学年間で点数を集計し、集まったポイントにより世界がより良いものになることを実感してもらうために、ワールドドリームツアーを考え出した。

写真のように、大きな世界地図に各地の問題とその解決策を書き出し、それぞれにポイント数を設定した。実際に集まったポイント分だけ色を塗っていくことによって、ベルマークを集めることが世界の問題解決につながることを可視化することが出来る。今年度までに30万円を超えるポイントが集まり、奉仕活動で訪れている児童施設に必要なテントを送ることができた。

「職員室の先生方、今回の順位は最下位ですよ。いったいどうしているのですか〜。」というような、歯に衣を着せぬベルマーク班の校内放送は名物になっている。



②スパイ大作戦「SDGs Headline」新聞班

編集長も記者も全部生徒が担当している新聞班は、学期に2回のペースでSDGs Headlineという新聞を発行している。

今年の年度初めに新聞班から Be Leaders 全体に連絡があった。「今年は皆さんの班にスパイを送ります！」つまりところスパイとは記者である。校外外での活動を伝えるために送り込まれたスパイ(記者)は、共に体験することによって、より生きた文章を読者に届けることが出来るという作戦である。

毎号趣向を凝らした内容は読みごたえがあり、特集記事から書籍の紹介まで、力の入った文章にファンも多い。



③「届けよう、服のチカラ」プロジェクト

難民の子供に服と笑顔を届ける ユニクロ班

ファーストリテイリングとUNHCRが呼びかけている「届けよう、服のチカラ」プロジェクトには、2020年度から参加している。昨年度から校外の諸団体に生徒たちが直接アポイントを取り、交渉して協力をお願いしている。

生徒たちは、手作りの手紙、ポスターを作成し、電話で交渉するなどして、地域の人と直接触れ合いながら活動を進めている。2021年度プロジェクトのアワードにおいて最優秀賞を受賞した。今年は30もの団体が趣旨に賛同し、子供服の回収をしてくださった結果、1万枚を超える子供服を送ることが出来た。協力先は主に、卒業生、メンバーの出身幼稚園、小学校や神社仏閣、商業施設などで、難民の人たちの現状や服のリサイクルによる環境保護への効果などを、発表する機会もいただいた。



ユニクロピオレ姫路店による出張授業

④「SDGs 出前授業」小学校出張授業班

小学校への出張授業のきっかけはユニクロ班の活動だった。4月に生徒たちがチラシを作成し、HPなどで宣伝をした。今年度はすでに姫路市内の小学校5校で5、6年生を対象に実施した。

授業内容は、基本的にSDGsの説明とBe Leadersの活動内容が軸となっているが、対象児童の学びの進み具合によって内容を変えている。また、小学生が飽きないように、クイズ形式で楽しく考えてもらえるように工夫している。

小学生の反応はとてもよく、時折鋭い視点での質問が飛んでくる。中高生たちがたじろぐこともあるが、交流を楽しみながら回を重ね、生徒たちのプレゼン力が飛躍的に向上した。

一番大事にしていることは、「子供でも、社会のために出来ることはあるので、一緒にやっ払いこう。」というメッセージで、ある授業の後、一人の

小学生から一緒に地域の清掃活動をしようという提案をもらい、このように地域でのつながりが生まれるのだと感じ、喜んだ。



姫路市立妻鹿小学校での授業はNHKの取材を受けた

⑤「海のごみオブジェ」海のごみ調査隊

株式会社 姫路環境開発さんの協力で、2020年度から、瀬戸内海の播磨灘で底引き網漁に同行させていただき、網にかかる海底のごみについての調査を始めた。

まずは、会社訪問を行い、企業としてどのように環境問題に取り組んでおられるかの説明を受け、実際に廃棄施設の見学も行った。

漁では大量のヒトデに交じってプラスチック、廃タイヤ、ビン、衣料などが引き上げられる。それを学校に持ち帰りきれいに洗ってみると、真っ先に生徒は、「全部大人が捨てたものだ」と気づいた。

集まったごみを使い、海の環境について考えてもらうためにオブジェを作ることとなり、生徒がデザインして完成したものが魚のオブジェである。仲間と話し合いながら創造的な作品に作り上げた。これは、エーオンジャパンの環境保護活動「Go!

Blue Project」によるごみアートコンテスト中高部門で優秀賞を受賞した。



⑥フードバンク活動

姫路青年会議所からの紹介で、生活困窮家庭への支援を行っているNPOフードバンクはりまの代表辻本さんからの話を聞いた際、日本では8人に一人が貧困状態にあるとの事実衝撃を受けた生徒たちが、今年度の活動の一つにフードドライブ運動をしようと計画した。

実際ボランティアに参加し、その後、校内外でフードドライブを実施し、多くの食品や粉ミルク、おむつなどを届けた。

春から夏にかけては校内でゴーヤとトマトを育て、100本以上のゴーヤを寄付した。今後も、支援を続けたい。



⑦清掃活動

以前生徒会が行っていた夢前川清掃活動を復活させたいと考えた生徒が、学校からごみを回収しながら歩く清掃ウォーキングを企画した。中学1年生が多数参加し、8kmの道のりを町の人に応援の声をかけていただきながら楽しく実践できた。

⑧弁論大会 松浦杯

初年度から開催している弁論大会は全校生が参加できるもので、今年は隣接する淳心学院の生徒も参加して行われた。中1から高2までの10名が「世界とつながるわたしたち」をテーマに、それぞれの思いを語った。

⑨校外における活動発表、ワークショップの開催



姫路青年会議所の未来環境創造委員会の方から、オープン例会におけるBe Leadersの活動発表の機会をいただいた。初めて市民の方に向けて、自分たちの思いと活動を伝えたところ大きな反響があり、アンケートには「大人である自分たちも何かしなければ強く思った。」との言葉があった。

また、環境活動家である谷口たかひさ氏からも「これからは横とのつながりを大切にするとさらに広がるだろう。」と応援のコメントをいただいた。

ピオレ姫路、ユニクロピオレ姫路店との共同開催で、エコバッグワークショップを実施した。開催にあたり、なぜエコバッグが環境を守ることにつながるのか子供たちに分かりやすく伝えるために、生徒オリジナルの劇を作った。当日は子供た

ちも一緒に劇に参加できるように工夫し、楽しみながらプラスチックごみ削減について考える1日となった。



3. 成果と課題

(1) 成果

①疑問の共有が気づきにつながる

チームとして社会問題に向き合う時に、一人の疑問をメンバーで共有し、一緒に調べていくことで、生徒たちが自ら「調べる力」「つながる力」「発信する力」を育み、一人一人がリーダーとなる。

また、それが他者に伝わった時に、さらにその思いを受けてつながりの輪が増えていく好循環を生み出した。

②若者の行動が周囲の大人の心を動かす

このようなつながりは学校外の地域の人に広がっていった。生徒たちのまっすぐな思いと行動に感動した周囲の大人たちが、「自分も何かしたい」と協力を申し出てくれる。また、生徒たちも、自分たちを認め、応援してくれる大人がいることで、社会に対して希望を持つことが出来る。みんなの共感が協働へとつながったのである。

③みんなで作る学校

本校の創立者である聖マリー・リヴィエは、1796年にフランスで学校を始める際、「みんなで学校をつくりましょう」と言った。生徒も教員も一緒になって動くときに、学校は生き物のように誕生する。そこで生徒が生き生きと活動することによって、学校全体が変容していく。それは、教師にとってもこれまでの「教える」職業としての教師のあり方を考える機会となった。

④教師の変容

教師の意識変革の一つのきっかけとして、8月に実施した教職員宗教研修会がある。年に一度、一日をかけて本校の教育理念の中心にあるキリスト教的な価値観について学び、考える研修会を企画しているが、今年度は「キリスト教の精神をど

のように社会課題・教育につなげていくカーサテナブル社会を担うミッションスクールの使命」をテーマに、NPO法人日本持続発展教育(ESD)推進フォーラム理事の岡山慶子氏をお招きし、対話型の研修会を行った。研修会では教員と職員全体が共に思いを分かち合い、社会課題の解決のために何ができるかについて考えた。この経験を通して、これから本校がESDに取り組んでいく意義を確認することができた貴重な体験となった。次は、その方法を考えていかなければならない。

(2) 課題

①体系的なESDプログラムの必要性

Be Leadersは授業、クラブ、生徒会のどこにも属さないグループであるため、生徒の意見が直接反映される自由度が高い活動だ。しかしそのため、体系的なESDの内容を学ぶ機会が少ない。教育課程の中で各教員が行っているESD的な学びを、本校の中で体系化することが課題である。

②学校全体の活動となるために

本来、燈台の光プロジェクトは全校生徒を対象にした教育プログラムである。学びと活動が両輪となり、社会における希望の光となるような学校を目指したい。そのために、Be Leadersがきっかけをつくり、それが学校全体に広がっていくことが理想である。

③燈台の光となるために

出前授業後、小学生から「なぜ賢明はSDGsに力を入れているのですか。」という質問に、賢明生がこう答えた。「私たちの学校には燈台の光というモットーがあります。社会のために自らが動き、燈台の光のような人物になるという意味です。だから私たちは、SDGsを目標に社会を少しでも明るくするために活動しています。そして、これは、先輩方から受け継いできた伝統でもあります。」

賢明女子学院の目指すところは、「燈台の光となるために」という彼女の言葉どおりである。このビジョンを生徒たちと共有することで、今後も共に学び、活動をしていきたい。

第 13 回 ESD 大賞
受賞校実践集

発行日:令和 5 年 2 月 7 日

発 行:NPO 法人日本持続発展教育推進フォーラム

<http://www.jp-esd.org>

〒104-0045 東京都中央区築地 2-12-10

築地 MF ビル 26 号館 5 階

Tel : 03-3545-3651

Fax : 03-5565-4914